

松本市文化財調査報告 No.211

長野県松本市

殿村遺跡

—第3次発掘調査報告書—



2013.3

松本市教育委員会

例 言

- 1 本書は、平成23年度殿村遺跡調査事業に係る、殿村遺跡第3次発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査から報告書作成まで、一連の作業は、平成23・24年度国庫補助事業として実施し、現地における発掘調査は平成23年7月19日から11月7日まで実施した。
- 3 本書の執筆は以下の分担で行った。
第Ⅱ章第3節3：原田健司、その他：竹原 学
- 4 整理作業および本書作成に係る作業分担は以下のとおりである。
遺物洗浄・注記：中澤温子
遺物接合：中澤温子
金属製品保存処理：洞沢文江
遺物実測・拓本・トレース：(焼物) 竹内直美、八板千佳、(石器) 原田健司
遺構図整理・トレース：荒井留美子
挿図版下作成(DTP)：伊藤 愛(遺構図)、原田健司(石器)、竹原 学(その他)
写真撮影：(遺構) 宮島義和、(遺物) 宮嶋洋一
- 5 本書の中で使用した遺構の略称等は、以下のとおりである。
竪穴住居跡→住、土坑→土、ピット→P、溝状遺構→溝
- 6 焼物(土器・陶磁器)実測図における断面の塗り分けは以下のとおりである。
白色：土師質土器、黒色：炆器(須恵器)・陶磁器、灰色：瓦質土器
- 7 土師質土器皿のタール状ないしスス状炭化物の付着範囲は、灰色で示した。
- 8 図中で使用した方位は真北を示す。また各面の調査区全体図中に示した国家座標値(世界測地系・第8系)は、平成23年3月11日に発生した東北太平洋沖地震以前の観測値で、地震変動に対する補正は行っていない。
- 9 調査から本書作成までの間、以下の方々から指導・助言・協力を得た。なお、調査指導委員等関係者については第Ⅰ章に記した。
赤澤徳明、阿部 来、市川恵一、遠藤公洋、引地節子、祢津宗信、松本建速、望月道彦、横内文人(敬称略)
- 10 本調査の出土遺物および写真・実測図等の記録類は、松本市教育委員会が管理し、松本市立考古博物館(〒390-0823 松本市中山3738-1 TEL0263-86-4710 FAX0263-86-9189)に保管している。

目 次

例言

目次

第Ⅰ章 調査事業の概要

第1節 事業の経緯	5
第2節 第3次調査の経過	7
第3節 調査体制	7

第Ⅱ章 第3次調査の成果

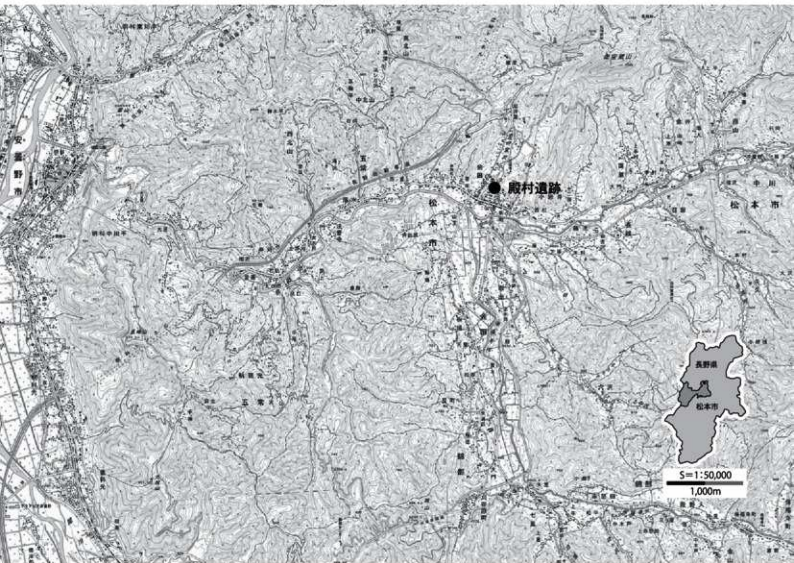
第1節 調査の目的と方法	13
第2節 遺構	
第3節 遺物	
1 焼物	30
2 金属製品	31
3 石器	33

第Ⅲ章 調査のまとめ

写真図版

報告書抄録

第1図 殿村遺跡の位置



第 I 章 調査事業の概要

第 1 節 事業の経緯

1 第 1 次調査と保存に至る経過

殿村遺跡は、松本市大字会田字殿村に所在する縄紋時代～中世の複合遺跡である。松本市教育委員会が平成 20 年に実施した、四賀地区統合小学校（四賀小学校）建設に係る第 1 次発掘調査において、15 世紀築造の石積を伴う大規模な中世の造成遺構と、数回にわたる改修により重層する遺構面が検出された。この予想外の成果は、調査期間の大幅な超過をもたらし、担当課である文化財課と学校教育課の間で再三にわたって協議を重ね、平成 21 年度まで調査期間の延長を図った。一方、良好に遺存する石積等の調査成果に、地元や市議会など各方面から注目が集まり、次第に保存の要望が寄せられるようになった。平成 21 年 7 月、四賀地区町会連合会から、「殿村遺跡保存及び四賀小学校早期建設に関する要望書」が提出されるに及び、松本市は、遺跡の全面保存と学校建設地の移転を決定するに至った。保存決定後は保護を前提に調査を進め、平成 22 年 1 月までに保護砂の被覆等の十分な措置を講じて、第 1 次調査が終了した。

2 調査指導委員会の発足と総合調査の計画

保存決定により、市教育委員会は、殿村遺跡の今後の調査方針について、文化庁および長野県教育委員会の助言を受けた。その結果、中世考古学ほかの専門家による殿村遺跡調査指導委員会を立ち上げ、平成 22 年度以降、遺跡の範囲や性格を明らかにするための確認調査を継続的に実施していくことになった。

平成 22 年 4 月開催の第 1 回調査指導委員会では、第 1 次調査の概要と保存に至る経過の報告、今後の発掘調査計画を示した。一方、各委員からは、殿村遺跡を取り巻く歴史的景観、とりわけ、中世以前、虚空蔵山麓一帯に宗教空間が広がっていた可能性に注目が及び、殿村遺跡は、その中に位置する宗教施設のひとつである可能性が指摘された。それを踏まえ、今後の調査は、殿村遺跡の発掘調査に加えて、空間全体を対象とした多分野にわたる総合的な調査を実施し、その中で遺跡の位置付けがなされるべきとの指導を得た。

3 殿村遺跡調査事業

委員会の指導を受け、市教育委員会は当初の計画を見直し、発掘調査を軸とした総合調査として「殿村遺跡調査事業」を計画した。そこでは、遺跡（点）から地域・背景（面）へと視点を拡大させ、「殿村遺跡とは？」「会田御厨と会田氏」「殿村遺跡の前章～原始・古代の会田盆地」「虚空蔵山を中心とする信仰世界の形成」「道と宿場と集落が織りなす景観」「水と緑が織りなす虚空蔵山麓の景観」「松本市の中での殿村遺跡」をテーマに掲げ、発掘調査、景観調査、社寺・信仰資料調査、城跡調査、民俗調査等を計画的に実施していくことにした。また、調査事業の核となる殿村遺跡の発掘調査については、第 1 次調査では追求できなかった、遺跡の全体像の把握を目的に、特に①中世を中心とする遺構・遺物の広がりや保存状況の確認、② 1 次調査で検出された石積を伴う造成遺構の広がりや全体構造の把握、③遺構群の時間的・空間的位置付けと性格の解明を主眼に進めることとなった。

4 発掘調査計画と第 2 次調査の実施

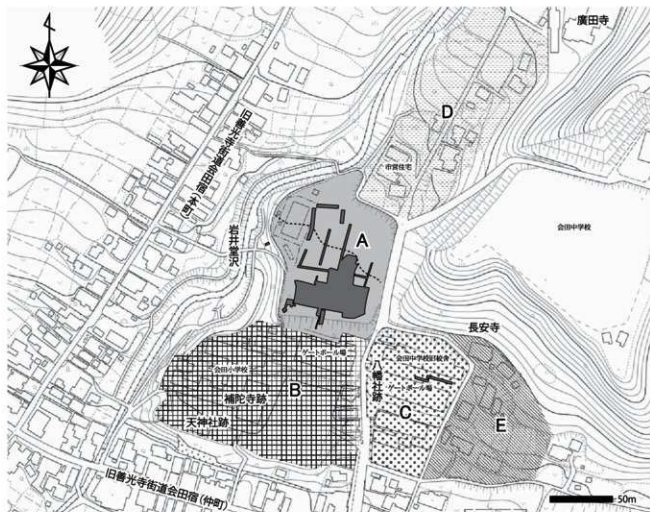
発掘調査実施計画では、現状で想定される遺跡の範囲、南北約 400 m・東西約 300m の空間を A～E の 5 ゾーンに区割りし（第 2 図）、毎年、第 1 次調査区のある A ゾーンとその他のゾーンを組み合わせる調査

を実施することとした。また、調査報告書は原則として次年度に刊行し、最終年度に第1次調査の成果を含めた総括編を刊行することを目標とした（第1表）。

この計画に基づき、初年度である平成22年は2カ所の発掘調査を実施した（2A1・2C1トレンチ）。2A1トレンチでは石積Aに対面する土塁の再確認と石積前空間の性格の解明、2C1トレンチでは、長安寺南側における中世造成面の確認が目的となった。調査終了後は遺物整理作業を経て、平成23年度に調査報告書（『殿村遺跡第2次発掘調査報告書』）を刊行した。

第1表 調査計画

ゾーン	予想される検出遺構等	土地利用状況		H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29
				2次	3次	4次	5次	6次	7次	8次	
A	中世造成面 縄紋・古代～中世前半期遺構面	空地	市有地	1次調査区周辺							
B	旧補陀寺関連遺構（中・近世） 旧天神社関連遺構（近世） 中世造成面 縄紋・古代～中世前半期遺構面	学校 住宅 CB場	市有地、 一部民有地				校庭			校舎	
C	長安寺関連遺構（中・近世） 八幡社関連遺構（近世） 中世造成面 縄紋・古代～中世前半期遺構面	旧校舎 CB場	市有地	旧校舎 周辺		旧校舎 周辺					
D	廣田寺関連遺構 中世造成面 縄紋・古代～中世前半期遺構面	畑地 宅地	民有地 一部市有地							休耕田 荒地	
E	長安寺関連遺構（中・近世） 縄紋・古代～中世遺構面	畑地 宅地	民有地							畑地	
調査報告書刊行				1次 概報	2次 報告	3次 報告	4次 報告	5次 報告	6次 報告	7次 報告	1・8次報告 （総括編）



第2図 ソーニング

第2節 第3次調査の経過

今回報告する第3次調査は、調査計画に基づき、平成23年度国庫補助事業として実施したものである。調査箇所は1カ所（3A1トレンチ）で、平成23年7月19日に着手、同年11月7日に終了した。また、報告書の作成は平成24年度国庫補助事業として作業を進めた。

調査から報告書刊行までの一連の事務および作業の経過は以下に示すとおりである。

<平成22年>

11月15日 平成23年度補助事業計画書提出

<平成23年>

2月10日 平成23年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出

4月1日 平成23年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知

7月19日 殿村遺跡第3次調査開始、準備作業にかかる

7月22日 2C1トレンチの調査に着手（表土掘削）

10月22・23日 平成23年度調査指導委員会開催

10月25日 2C1トレンチの埋め戻し開始

10月27日 埋め戻し完了

11月7日 現地における作業をすべて終了

殿村遺跡埋蔵文化財発見届および保管証、発掘調査終了報告書提出

11月16日 平成24年度補助事業計画書提出

<平成24年>

2月13日 平成24年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出

3月26日 第2次発掘調査報告書刊行

4月10日 平成24年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知

4月14日 平成23年度調査報告会・講演会開催（四賀支所ビナスホール）

7月17日 虚空蔵山城跡第2次調査開始

10月1日 殿村遺跡第4次調査開始

11月10・11日 平成24年度調査指導委員会開催

11月21日 虚空蔵山城跡第2次調査完了

12月26日 殿村遺跡第4次調査完了

<平成25年>

3月25日 第3次発掘調査報告書刊行

第3節 調査体制

<平成23年度>

調査団長 伊藤 光（松本市教育長）

調査担当 竹原 学（主査）、宮島義和（嘱託）

発掘協力者 塩原政夫、塩原正幸、長岩千晴、福原正子、待井正和、召田尚武、矢満田伸子

整理協力者 荒井留美子、内田和子、柏原佳子、草間恵美、久根下三枝子、佐々木正子、白鳥文彦、竹内直美、竹平悦子、奥 理恵、中澤温子、洞沢文江、村山牧枝、安田津由紀

事務局

松本市教育委員会文化財課

塩原明彦（課長）、大竹永明（課長補佐・埋蔵文化財担当係長）、直井雅尚（主査）、柳沢希歩（嘱託）

殿村遺跡調査指導委員会

委員長 笹本正治（信州大学副学長）

委員 小野正敏（大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事）

辻 誠一郎（東京大学大学院教授）

中井 均（滋賀県立大学准教授）

中澤克昭（長野工業高等専門学校准教授）

水澤幸一（新潟県胎内市教育委員会生涯学習課係長）

指導・助言 寺内隆夫（長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事）

<平成24年度>

調査団長 吉江 厚（松本市教育長）

調査担当 竹原 学（主査）、伊藤 愛、宮島義和（嘱託）

報告書担当 竹原 学、伊藤 愛、宮島義和、原田健司（嘱託）

調査員 青木教司

発掘協力者 大滝清次、小岩井 洋、塩原正幸、長岩千晴、古屋美江、待井正和、矢満田伸子

整理協力者 荒井留美子、市川二三夫、柏原佳子、竹平悦子、洞沢文江

事務局

松本市教育委員会文化財課

伊佐治裕子（課長）、大竹永明（課長補佐・埋蔵文化財担当係長）、直井雅尚（埋蔵文化財担当係長）、柳沢希歩（嘱託）

殿村遺跡調査指導委員会

委員長 笹本正治（信州大学副学長）

委員 小野正敏（大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事）

辻 誠一郎（東京大学大学院教授）

中井 均（滋賀県立大学准教授）

中澤克昭（長野工業高等専門学校准教授）

水澤幸一（新潟県胎内市教育委員会生涯学習課文化財係長）

指導・助言 寺内隆夫（長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事）

第Ⅱ章 第3次調査の成果

第1節 調査の目的と方法

1 調査地の選定とトレンチの配置（第3図）

現状保存決定後、2回目となる今回の調査では、昨年度に継続して、1次調査で十分追求できなかった平場遺構周辺における、盛土（整地土）層や切岸の状況を確認することを目的とした。今回対象とした平場の南西域は、1次調査において、1面～3・4面まで盛土層上に存する遺構面と、厚い盛土層下に広がる旧地表面（5面）の、都合4面の遺構面が存在することが判明している。

そこで今回は、1次調査区の南西外側に、南北11.1m・東西7.6m、逆L字形の調査トレンチ（3A1トレンチと呼称）を新たに設定し、各遺構面の広がりを確認するとともに、平場南面の切岸の状況を確認する調査を実施した。当初、平場西面切岸も確認する予定であったが、会田本町から小学校・ゲートボール場に通じる道路が敷地西辺を通過しているため、今回は調査を断念した。

2 調査手順

調査はまず、調査トレンチより東西・南北ともに3m程広く、重機を用いてグラウンド造成に係る盛土層（厚さ約1.0～1.4m）を除去し、昭和28年当時の地表面～耕作土直下を検出した。ここを調査開始面としてトレンチを設定し、以後、人力作業によって層位的な掘り下げを行い、3・4面まで面的調査を実施した。さらに、整地土層と5面の状況を確認するため、トレンチ西壁と北壁に沿って幅0.6～1.3mの断ち割りトレンチを設け、地山而上までの掘り下げと遺構確認を行った。

3 調査面・遺構名・番号管理

今回の調査で確認された遺構面は、1次調査区から続く1面から3・4面まで5面を数える。さらに、これまでの調査では、遺構面としての確認が明確になされていなかった、1面より上位の面が新たに検出されたため、これを最上面と仮称して調査を実施した。

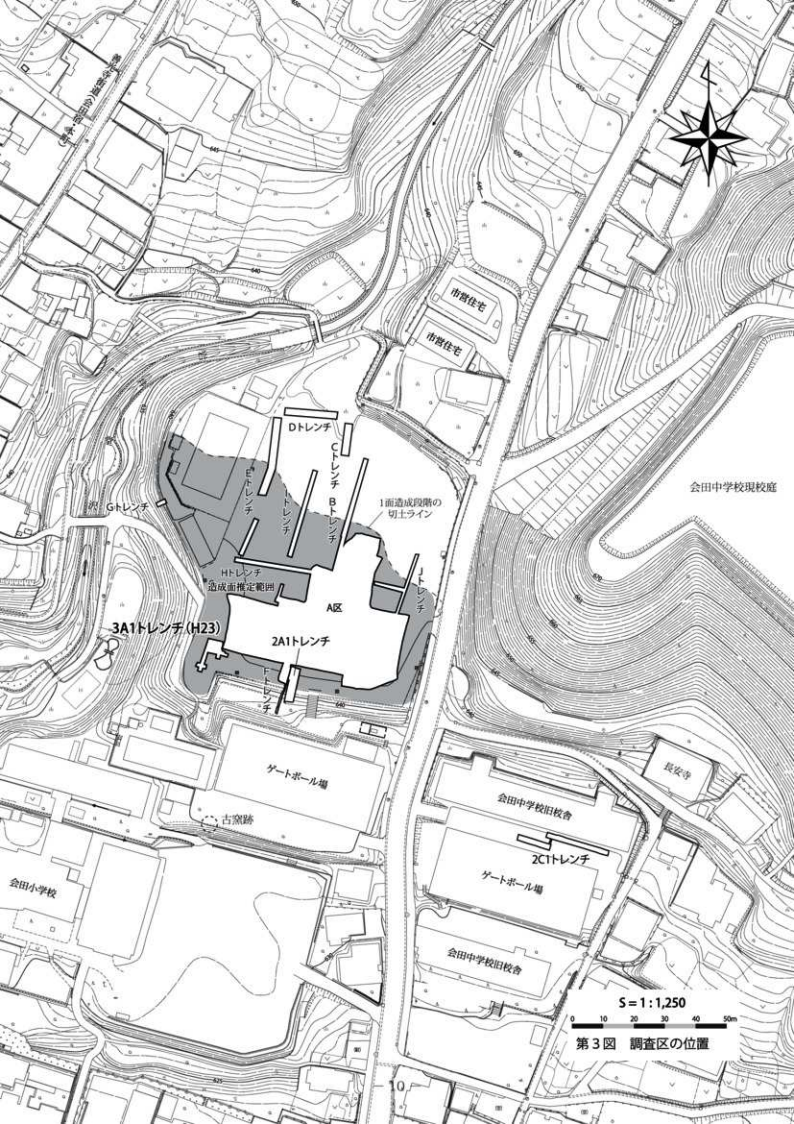
遺構番号はこれまでの調査との重複を避けるため、後続する区切りのいい番号（1451～）から開始し、1次調査の方針に従って、内容が判明した時点で遺構種別を番号の前に冠した。石積や石列等特定の遺構も1次調査からの連番とした（石列22～）。

4 記録

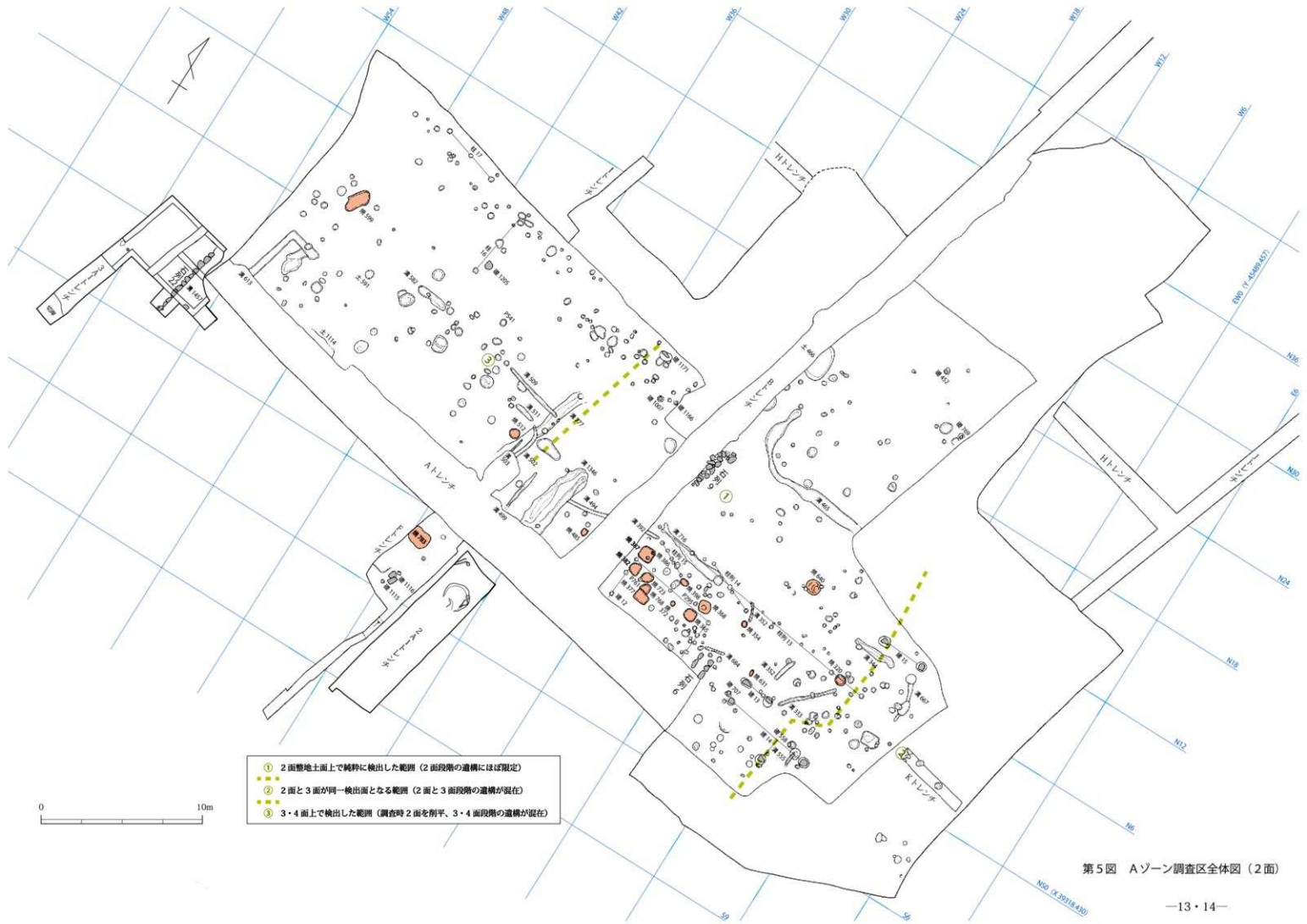
遺構測量に係る基準線は、1次調査で設定したグリッドを踏襲した。この基準線は、国家座標（世界測地系・第8系）に拠っているが、例言でも触れたように、東北太平洋沖地震による地殻変動以前の観測値を補正せずに使用している。これは、1次調査との整合を図るための措置である。

第2表 調査成果一覧

調査期間	平成23年7月19日～11月7日	調査面積	36.0㎡	
検出遺構		出土遺物		
最上面	ビット1、溝状遺構2（中世か）	縄 紋	土器（深鉢）、石器（石礮・スクレイパー・敲石・二次加工ある剥片他）	
1面	溝状遺構2、石列1（中世）		奈良・平安	黒色土器（杯 or 椀）
2面	ビット1、溝状遺構1、石列1（中世）			須恵器（杯・蓋・壺・甕）
3・4面	石列1			灰釉陶器（小瓶）
5面	ビット4、溝状遺構1（中世） 住居址1（中世以前）		中 世	土師質土器（皿・播鉢・内耳鍋） 瓦器（風鈴） 埴器（須恵質播鉢、甕） 陶器（皿・控鉢・瓶） 磁器（青磁・染付） 銭貨（治平元宝）

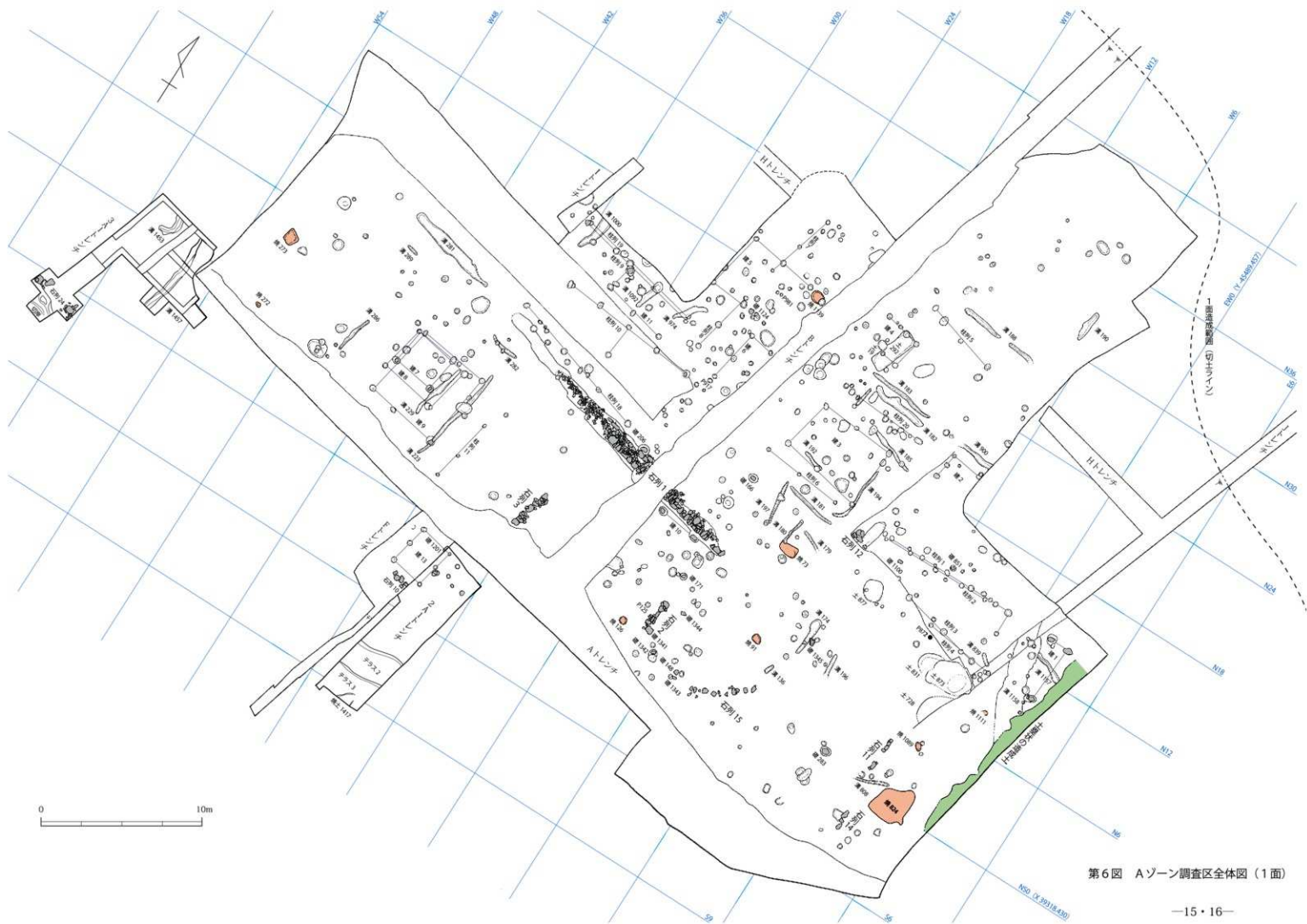


第3図 調査区の位置

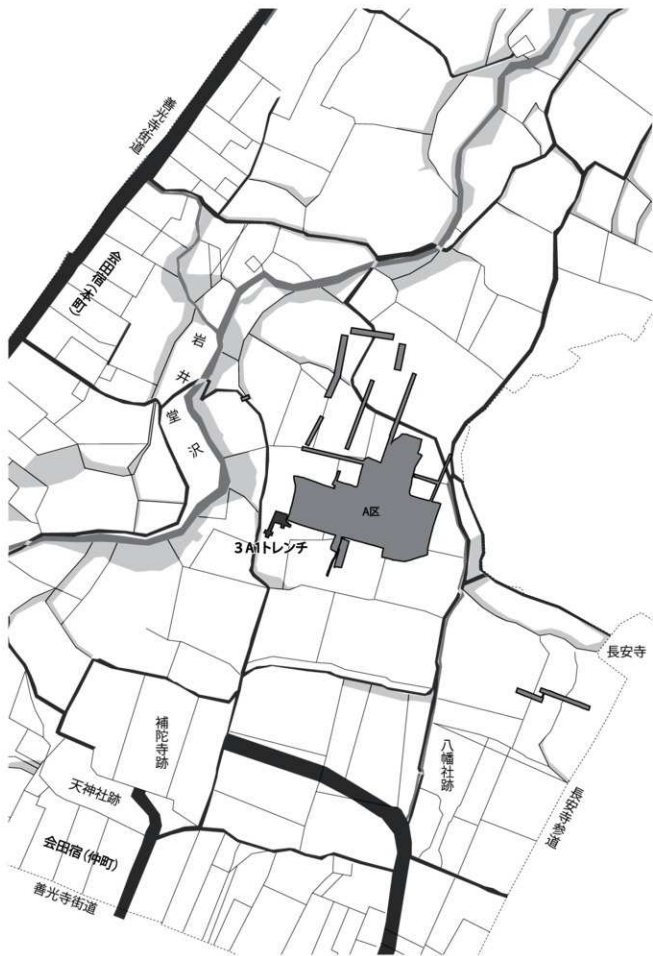


- ① 2面整地土面上で検出した範囲（2面段階の遺構にはぼ限定）
- ② 2面と3面が同一検出面となる範囲（2面と3面段階の遺構が混在）
- ③ 3・4面上で検出した範囲（調査時2面を削平、3・4面段階の遺構が混在）

第5図 Aゾーン調査区全体図（2面）



第6図 Aゾーン調査区全体図(1面)



第7図 調査区と周辺の地割(明治24年)

第2節 遺構

1 3A1トレンチの概要と土層構成、遺構の概要（第3表、第3～7・12・13図）

本調査トレンチは、1次調査区の南西隅に接し、南北11.1m・東西7.6m（いずれもグラウンド盛土を除いた旧地表面での規模）の逆L字形に設定したものである。地形の現況は、昭和28年の造成によるグラウンドの盛土が厚く覆い、旧地形を窺い知ることはできない。このグラウンド盛土を除去すると、畑地として利用されていた昭和28年までの地表面が現れる。標高は、北東隅639.9m、北西隅639.5m、南東隅639.7m、南西隅639.1mであり、東から西へ、また北から南へ緩く下降する傾斜面をなしている。

ここから、遺構面最上面までの深さは30cm前後で、ほぼ均等の厚さでそれ以降の堆積土が覆っている。最上面までの層序は2層構成である。うち、上位の耕作土（1層）は、畑作による畝が東西方向に1.2m間隔で走っており、下位の2～4層に割り込む。2層は耕作土あるいは3・4層が耕作で攪乱を受けたもので、中世以降の土器・陶磁器等を少量含む。3・4層は最上面を覆うシルト層で、中世以降の遺物を含み、人為的な盛土の可能性があるが、その時期は分からない。この層を除去すると、調査トレンチ北半部で遺構面最上面が、南半部では1面が現れる。

盛土（整地土）上の各遺構面における遺構分布は、1次調査区と比較して著しく少なく、皆無に等しい。遺構密度が低い状況は各面で一様に看取され、これは、今回の調査域における平場空間の性格に関わる事象と受け取られる。一方で、2面段階から1面段階にかけて、継続的に使用される遺構（溝1457）も存在する。

次に、厚い盛土層は、断面観察から構築過程や改修の状況が窺え、その過程で設けられた石列も見出された（石列23）。また、盛土下の旧地表面（5面）からは、造成開始以前の中世前半期に位置付く遺構が検出された（溝1455他）。5面における中世の遺構は、1次調査区西半部の微高地上において、溝、ピット等が確認されていたが、具体的に遺物を伴う遺構の検出は今回が初めてである。

2 5面の遺構（第3表、第4・8・12・13図）

概要 本遺構面は、調査区西壁下および北壁下の断ち割りトレンチで確認を行った。3・4面までの基盤となる盛土層下に広がる自然地形面で、南北方向はほぼ平坦、東西方向は約20cmの差があり、西に緩く下降している。

5面の基盤土は、上層が黒褐色シルト層（82・83層）で、縄紋時代～中世の遺物を含む。長期間にわたって徐々に土壌化が進んだ旧地表土で、層厚は最大50cmに達する。従って溝1455等中世の遺構は上位から、3住等古い時期の遺構は、より下位の層位から掘り込まれる。

この旧表土層の最下部83層は、次の84層に至る漸移層である。84層は遺跡の乗る地形面の基盤土として、1次調査区西半部の微高地を形成する固く締まった黄褐色のシルトで、岩井堂沢・うつつ沢の浸食活動によって、上流域からもたらされた、第三紀層に由来する堆積物である。土中には様々な粒度の輝石安山岩礫を含み、時に数10cm以上の巨礫も含まれる。輝石安山岩は、虚空蔵山や立峠周辺の稜線頂部に見られる貫入層に由来するものである。

住居址3 断ち割りトレンチ南寄りで見出された。83層上面付近から掘り込まれ、84層中に達する遺構である。調査は一部分にとどまり、全体像を窺うことはできないが、掘り込みや内部施設の状況から、竪穴住居址と判断した。遺構の状況は、北壁と壁下の周溝、柱穴と思われるピット2基、床面の一部が検出された。覆土はわずかに炭を含む黒褐色シルトが堆積する。壁面の立ち上がりは緩く傾斜し、周溝底面から30cmの高さを確認できる。壁下には幅25cmの浅い周溝が巡っている。柱穴と推定されるピットは、周溝と床面の境に40cm間隔で並列する。直径20～24cm・深さ17～25cm、覆土は旧表土とほぼ同質の黒

褐色シルトの単層である。

遺物は、砂岩の剥片が1点得られたのみで、遺構の帰属時期は分からない。しかし、断面観察の結果から82層中までは立ち上がりを追うことができないため、中世より以前、遺構の形状から古代あるいはそれ以前の遺構と見られる。

溝 1455 断ち割りトレンチ北半部において検出された、南下する溝状遺構とその南端部に接続する円形土坑を総称する。本址は82層上面から掘り込まれ、83層中から84層上面で検出作業を行った。溝状遺構は、検出面での幅55～70cm、83層上面からの深さ30～40cmで、底面は緩く窪み、西縁が一段深まっている。北半部はトレンチと平行に南下し、南半部は緩くカーブして若干東に向きを変え、幅を広げて円形土坑に接続する。覆土は黒褐色シルトで、トレンチ北壁下から1.5mの範囲に8～42cm大の輝石安山岩の角礫が上層から底面付近まで集積していた。

円形土坑は、上部に石列23があり、十分な調査が行えなかったが、溝状遺構との接続部周辺と、南西部の状況から、南北方向の長径3.1m以上の楕円形を呈するものと思われる。遺構底面は播鉢状を呈し、若干鉄分が沈着する表面は固く締まる。覆土は溝状遺構から続く黒褐色シルトで、自然堆積の様相を呈する。中層～下層に5～40cm大の角礫・亜角礫が落ち込むように散在する。

遺物は覆土中から須恵器杯蓋片、石器類の他、土師質土器皿3点、須恵質播鉢1点、東海系無軸陶器の捏鉢2点、妬器(常滑)の壺・甕3点、合計9点、中世の焼物が得られた。いずれも破片であるが、これらの主要な遺物から、本址は中世の遺構と見做され、その特徴から、水溜施設と導水路と推定される。

ピット 溝 1455 周辺から4基の円形ピットが検出された。このうち、P1459・P1460については、溝 1455 に付属する遺構と考えられ、さらに周囲には、直径10cm未満の小さいピットが3基存在する。P1456は直径20cm、84層上面からの深さ20cmを測る単独の遺構である。

3 3・4面の遺構(第3表、第4・8・12・13図)

遺構面の概要 3・4面段階の遺構面は、52層上で捉えた。調査トレンチ北東部では、上層の溝 1457を残したため、西壁に沿った範囲で検出をした。遺構面は、1・2面のような固く締まった表面化粧土が見られず、目の粗い盛土面であるため、2面整地段階において、本来の遺構面が削平されているのではないかと考えられる。本遺構面からの検出遺構はない。削平を受けているにせよ、ある程度の深さを有する柱穴等の遺構も何ら見当たらないため、元々遺構密度は低かったとみられる。

下層盛土 基盤となる盛土層は非常に厚く、80～110cmを測る。西壁下の断ち割りトレンチにおける断面観察の結果、色調や土質から上層と下層に二分される。これらが時期差によるものか否か、にわかに判断は難しいが、少なくとも下層盛土上面を遺構面として積極的に捉えられる材料はない。

下層盛土は、5面直上を覆い、礫を含んだ黒褐色のシルトである(60～62・67・79・91層)。総じてきめが粗く、層厚50～90cm、上面はほぼ平坦である。概ね上下3～4層に細分されるが、土質に大きな違いはなく、5面直上から均一に盛土を繰り返している。南端部は上面から屈折して、傾斜角約40°で下降する直線的な法面を呈する。上層盛土を施した際に整形されていると考えられるが、先端部の盛土は下半にとりわけ精良なシルトを何層も重ねて貼っている(63～66・80・81層)。

石列 23 下層盛土先端部から3.2m北寄りには、中位に石列23が存していた。幅30cm前後・奥行25cm前後、厚さ13～20cmの輝石安山岩の角礫・亜円礫(未加工)を1～2段積み重ね、走向はN71°-Wである。本遺構は、土層観察から、下層盛土の工程の初期段階において構築されていることが読み取れる。まず、石列設置位置の周囲、東西3.5m程の範囲において、5面を15cm程掘り窪め、そこに精良な褐色シルト(86層)を貼り、その上に石列を配している。その後、石列の周囲を精良なシルトで薄く

何層も封じながら、南北両側の盛土を順次積み重ねている。この際、南側すなわち先端部側を土塁状に先に土盛りしている(62・67・76・79層等)。

以上の所見から、本址は平場築造の最初の段階で施された土塁状の先端部盛土に伴う構築物と推定される。

上層盛土 下層盛土に対し、礫をあまり含まない均質なシルトで構成され、層厚27～33cmを測る。基本的に黒褐色シルト塊主体の層と黄褐色土塊主体の層が薄く互層とする敷築が行われ、特に南寄りにおいては2cm前後の薄層を念入りに積み重ねる状況が窺える(52a～e層)。

平場南端の切岸 上層盛土の南端は、下層盛土と同様、45°近い急角度で下降する法面となっており、ここが3・4面段階の平場南端の切岸と理解される。天端から法面にかけての盛土は意識的に精良なシルトを貼り、堅緻に叩き締めている(45～51・54～58層)。法尻は垂直に近い角度となり、その下端を区切るように礫2個が石列状に連なっている。調査範囲が狭く十分な追求は出来なかったものの、2面段階の築造に伴って破壊された石積みの可能性がある。

遺物 盛土層中から、縄紋時代の石器と15点の焼物片を得た。うち4点は奈良・平安時代の黒色土器、須臾器、灰黒陶器である。その他11点は中世の焼物で、内訳は土師質土器皿6点、同播鉢1点、同内耳鍋1点、東海系無釉陶器鉢1点、青磁碗1点、妬器甕1点である。

4 2面の遺構(第3表、第5・9・12・13図)

遺構面の概要 2面段階の遺構面は、調査トレンチの全域で検出した。3・4面の盛土上に5cm前後の厚さで精良な褐色シルトを貼り、非常に堅緻な面をなしている。また、この段階においては、平場が南に約1.7m拡張され、それに伴って前段階の切岸前方を埋め立てている。

遺構はトレンチ東部において溝1457・石列22が検出されたほかはP1458とその西の炭化物集中以外、皆無の状況であった。

切岸の盛土 本面の切岸は、おそらく1面段階において改変を受けていると考えられる。平場末端から屈折して下降する法面は、その法尻までは捉えられなかったが、天端から1m程下降しながら次第に傾斜を緩めている。南側の状況が分からないが、ここに2A1トレンチの土塁南側で見られたようなテラスが存在している可能性もある。

切岸周辺の盛土の状況は、断面観察の結果、2段階に盛土を施していることが判明した。まず、下層盛土は、トレンチ壁面中位の礫群、すなわち3・4面の平場末端から一段下がった位置から下層で、礫を含み黒褐色を呈するよく締まったシルトで盛土を施し、法面付近には精良なシルトを用いている。礫群は約80cm四方の平石を中心に数個が集まっているが、平石を連ねた石列の可能性もある。また、盛土先端部における上層盛土との切り合い方を考慮すると、両者の間には時間差が存在するのかもしれない。

上層盛土も下層と同様、礫を含む黒褐色のシルトを基本とし、切岸の下半には精良なシルトを貼っている。

溝1457・石列22 調査トレンチ北東部で検出され、1面段階まで継続する遺構である。本址は、付属する石列22をもって西縁をなし、南北方向および東側の調査区外に広がる。調査範囲での規模は、南北6m以上・東西3m以上である。調査範囲において、西壁の大半は石列の側面が立ち上がりとなるが、石列が途切れる北部では傾斜した法面をなす。本址の名称は、調査段階から溝状遺構の名称を冠しているが、1次調査区において東縁の立ち上がりを確認できていないため、石列を境とする段差の遺構とも受け取れる。

遺構の西を区切る石列22は、軸方位N-10°-Eに方形の平石12個を延長5.1mにわたって直線的に配し、北側はトレンチ北壁の手前で途切れる。築石は幅30～55cm・奥行21～43cm・高さ5～35cmの角礫あるいは角礫を列状に配し、溝状遺構や2面の傾斜に合わせて南側をわずかに下降させる。石材は、北から6番目に砂岩、それ以外には輝石安山岩を用いている。いずれも被熱しており、砂岩は風化が著しい。

また、天端とともに、溝状遺構の内壁にあたる側面は、一直線に面を描いている。そのため、北から2番目、6番目、8番目の築石は、粗割りして面を確保した石材を用いている。なお、築石が多段に積まれていたか否かは所見を得られなかった。

溝状遺構の底面は1面段階と共通で、平坦かつ非常に堅緻な面をなす。特に南半部では、貼床のようなあり方を呈し、表層には粘質土が薄く貼られ亀裂が見られる。全体に南にわずかに傾斜し、南北方向の高低差は5cmを測る。

その他の遺構 トレンチ西壁の中央付近の遺構面上に、直径15cm・深さ4cmの浅いピットがある。その西には炭片の集中が見られたが、特に掘り込みや焼土等はなく、表層の盛土に混じっているものである。

遺物 遺構面および盛土中から中世の遺物は出土していない。溝1457からの出土遺物は、すべて1面段階のものである。

5 1面の遺構（第2表、第6・10・12・13図）

概要 1面段階の遺構面は、調査トレンチ南端部を除くほぼ全面で確認された。2面上に褐色シルト（8層）を10～15cm前後に土盛りし、平坦な面を造り出している。1次調査で確認された、1面を被覆する整地土層（黄褐色シルト）は、本調査トレンチにおいては北辺部でわずかに確認された（7層）が、以南では厚さを減じて消滅する。遺構は、溝1457が2面段階から継続するが、そこから西側の状況は2面と同様、皆無に等しい状況である。また、平場南面切岸の天端には石列24が構築される。

切岸と石列24 トレンチ南端部で検出された平場南面の切岸は、2面段階と同位置にある。本段階では、切岸に沿った平場南縁に石列24が設けられる。本址は、幅40～54cm・奥行42～56cm・厚さ10cm前後、未加工の角張った平石を一列に配したもので、重機によるトレンチ掘削時に中央の石材を除去してしまった。築石の上面はほぼレベルを描いているが、元々1段積みだったかどうかは分からない。築石底面は2面盛土上に接し、周囲を5～25cm大の角礫・亜角礫で間詰めする。

溝1453 調査トレンチ北西部で検出された弧状を呈する遺構である。幅30～50cm・南北長1.45m以上・深さ6～10cmで、丸底に掘り込まれる。7層に似た黄褐色シルトで埋められ、遺物は得られなかった。

溝1457 2面段階から継続する遺構である。底面の状況は前述の通りであるが、盛土による整地面の上昇に伴い、西縁を画す石列22を埋め、緩やかな2段落ちの掘り方に変更されている。覆土は、人為的に埋め戻されたと考えられる、黄褐色土塊を含む褐色シルト（a～e層）で、一部に鉄分を多く含む層も見られる。遺物は、底面から出土した染付皿片2点のみである。

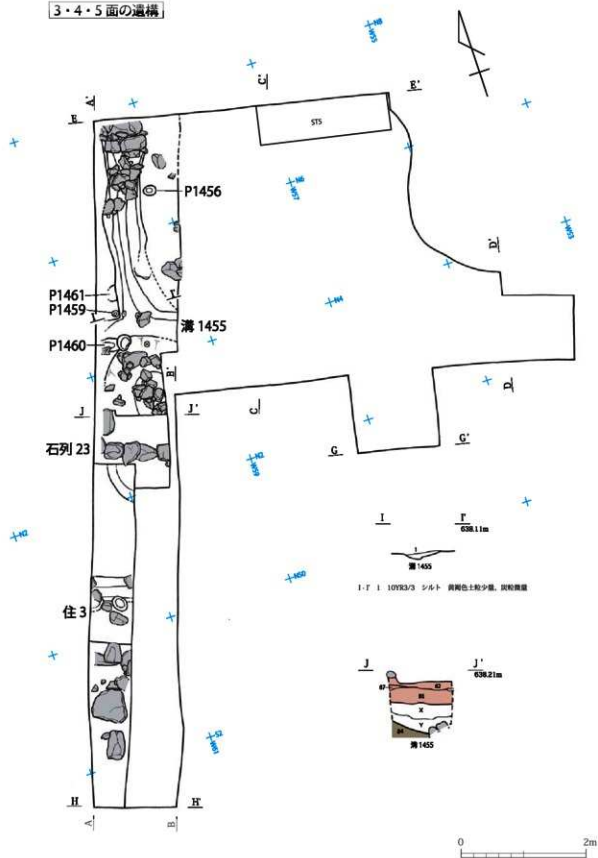
遺物 溝1457以外からの遺物の出土は希薄で、他に石器、縄紋土器片1点、妬器片1点があるのみである。

6 最上面の遺構（第3表、第11～13図）

3・4層の掘り下げ作業を実施したところ、これらの直下から明瞭な平坦面が現れた。暗褐色の堅く締まったシルトで、トレンチ北部にその広がりが見られる（7層）。調査トレンチ北壁から約1.9mの位置にはわずかな段があり、南側が一段低くなる。遺構は、トレンチ東部にP1431、溝1452・1454が集中しているが、いずれも周囲に比べて暗色を呈するものの、遺構としての認定には疑問も残る。

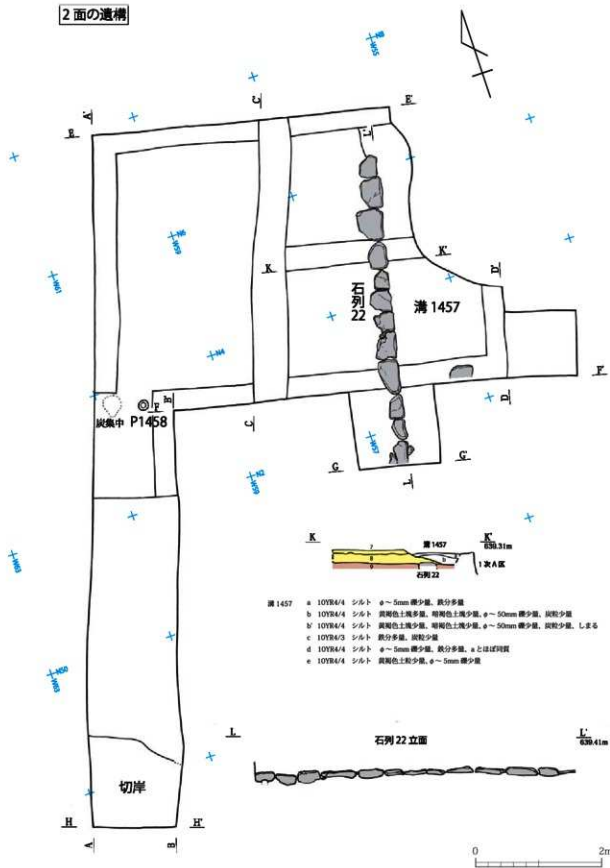
遺物は、盛土中から内耳鋸1点、東海系無軸陶器埴鉢1点、妬器1点、石器類を得た。前述のように、本遺構面は、これまでの調査では確認されていなかったもので、その位置付けには周辺部のさらなる調査が必要である。

3・4・5面の遺構



第8図 5～3面の遺構

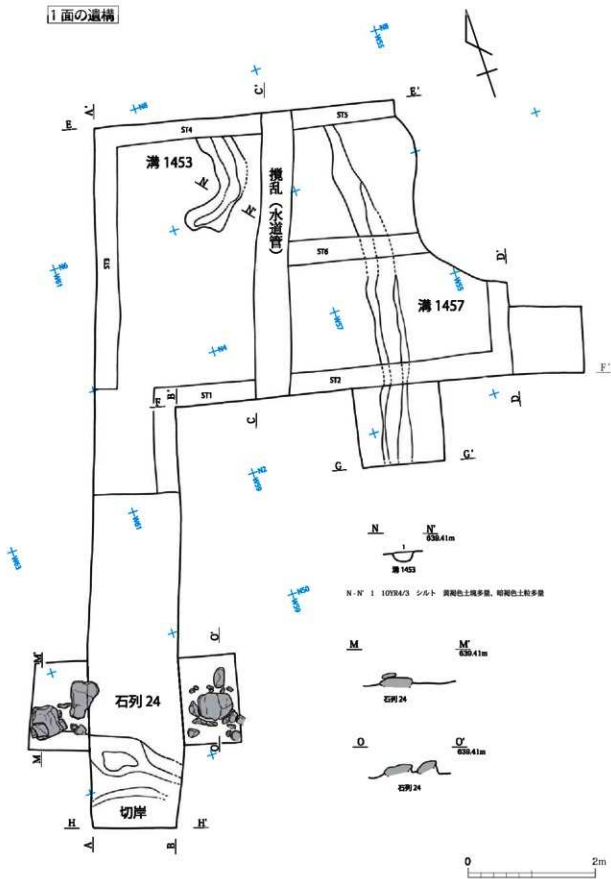
2面の遺構



- 溝1457
- a 10YR4/4 シルト ϕ ~5mm 礫少量、鉄分多量
 - b 10YR4/4 シルト 黄褐色土塊少量、暗褐色土塊少量、 ϕ ~50mm 礫少量、炭粒少量
 - c 10YR4/4 シルト 黄褐色土塊少量、暗褐色土塊少量、 ϕ ~50mm 礫少量、炭粒少量、Lとまる
 - d 10YR4/3 シルト 鉄分多量、炭粒少量
 - e 10YR4/4 シルト ϕ ~5mm 礫少量、鉄分多量、aとほぼ同質
 - f 10YR4/4 シルト 黄褐色土塊少量、 ϕ ~5mm 礫少量

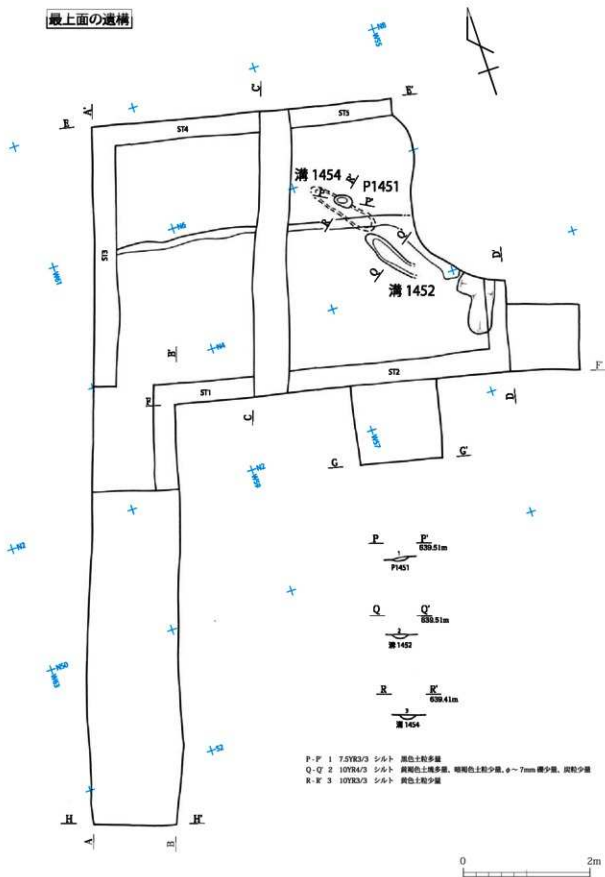
第9図 2面の遺構

1面の遺構

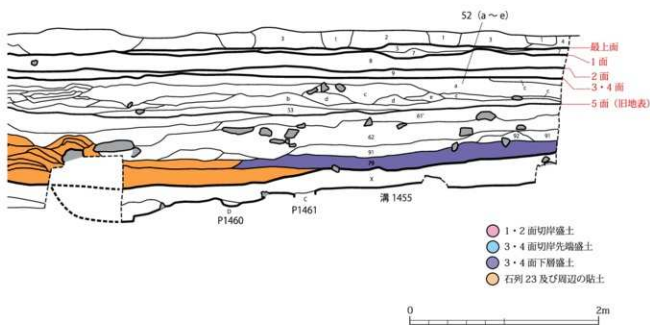
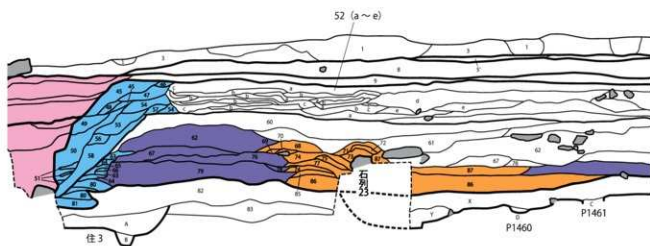
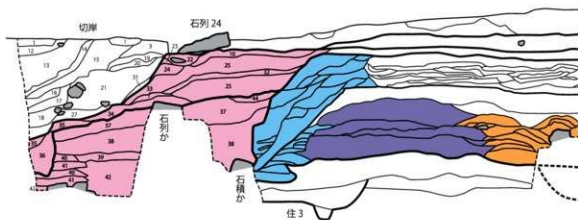


第 10 図 1 面の遺構

最上面の遺構



第 11 図 最上面の遺構



第 13 図 トレンチ西壁土層断面細部図

第3表 3A1 トレンチ壁面土層観察表

土層No.	土色	土質	しまり	含有物	分類・備考
住居址3					
A	10YR2/3	シルト		黄褐色土粒少量、炭塊少量、 $\phi \sim 2$ mm礫少量	
B	10YR2/3	シルト		黄褐色土粒少量	
P1461					
C	10YR2/3	シルト		黄褐色土粒少量	
P1460					
D	10YR2/3	シルト		黄褐色土粒多量	
溝 1455					
X	10YR3/3	シルト		黄褐色土塊少量、 $\phi \sim 30$ mm礫少量、炭粒少量	
Y	10YR2/2	シルト(やや粗)		黄褐色土粒少量、炭粒少量	
壁面土層(表土・盛土)					
1	10YR4/4	シルト		$\phi \sim 10$ mm礫少量	耕作土
2	10YR4/4	シルト		$\phi \sim 80$ mm礫多量	耕作土 or 掘乱
3	10YR4/4	シルト		黄褐色土塊多量、暗褐色土粒少量、 $\phi \sim 50$ mm礫少量、炭粒少量	盛土?
3'	10YR4/3	シルト		黄褐色土塊少量	〃
4	10YR3/4	シルト		黄褐色土塊少量、 $\phi \sim 50$ mm礫少量	〃
5	10YR4/4	シルト		黄色土粒少量、炭粒微量	最上面整地土(盛土)
6	7.5YR3/3	シルト		混合物はほとんどなく均質	〃
7	10YR4/4	シルト		黄褐色土塊多量、黄褐色砂粒多量、 $\phi \sim 20$ mm礫少量	1面を覆う黄褐色土
8	10YR4/4	シルト		黄褐色土塊少量、黄褐色土粒少量、 $\phi \sim 20$ mm礫少量、炭粒少量	1面整地土(盛土)
8'	10YR4/4	シルト		黄褐色土塊多量	〃
9	10YR3/3	シルト		黄褐色土粒少量、 $\phi \sim 20$ mm礫微量	2面整地土(盛土)
9'	10YR3/3	シルト		黄褐色土粒多量、 $\phi \sim 20$ mm礫微量	〃
10	10YR4/4	シルト・精良	よくしまる	黄褐色土粒多量、 $\phi \sim 5$ mm礫微量	1・2面切岸盛土(上層)
11	10YR4/4	シルト		黄褐色土粒少量、焼土粒微量、炭粒少量	1・2面切岸南側の埋立土
12	10YR4/6	シルト		黄褐色土粒少量、 $\phi \sim 2$ mm礫微量	〃
13	10YR4/4	砂質	軟	黄褐色土粒多量、 $\phi \sim 10$ mm礫多量	〃
14	10YR4/4	シルト		$\phi \sim 20$ mm礫少量、炭塊多量、焼土塊微量	1・2面切岸南側の流入土
15	10YR4/4	シルト		$\phi \sim 20$ mm礫少量、炭塊微量	〃
16	10YR4/6	砂質	軟	黄褐色土粒少量、 $\phi \sim 20$ mm礫少量	〃
17	10YR4/4	シルト		$\phi \sim 20$ mm礫少量	〃
18	10YR4/6	砂質		$\phi \sim 30$ mm礫多量	〃
19	10YR4/4	シルト		$\phi \sim 5$ mm礫少量、炭粒多量	〃
20	10YR4/6	シルト		$\phi \sim 5$ mm礫少量	〃
21	10YR4/4	砂質	軟	$\phi \sim 15$ mm礫多量	〃
22	10YR4/4	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒少量、 $\phi \sim 5$ mm礫少量、硬い	1・2面切岸盛土(上層)
23	10YR6/4	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒少量、 $\phi \sim 5$ mm礫少量、硬い	〃
24	10YR4/4	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒少量、炭粒微量、硬い	〃
25	10YR2/3	シルト	しまる	黄褐色土塊少量、 $\phi \sim 15$ mm礫少量、炭粒少量	〃
26	10YR4/4	シルト・精良		黄褐色土粒少量、黒褐色土粒多量、 $\phi \sim 10$ mm礫微量	〃
27	10YR4/4	シルト・精良		黄褐色土粒多量、黒褐色土粒多量、 $\phi \sim 20$ mm礫微量	〃
28	10YR4/4	砂質	軟	黄褐色土粒少量、 $\phi \sim 10$ mm礫少量	1・2面切岸南側の流入土
29	10YR4/4	砂質	軟	黄褐色土粒微量、 $\phi \sim 10$ mm礫少量	〃
30	10YR4/4	シルト		黄褐色土粒少量、 $\phi \sim 30$ mm礫少量、炭塊微量	1・2面切岸盛土(上層)
31	10YR4/4	砂質	しまる	黄褐色土粒多量、 $\phi \sim 15$ mm礫少量	1・2面切岸南側の流入土
32	10YR2/3	シルト・精良	しまる	黄褐色土塊多量、 $\phi \sim 30$ mm礫微量	1・2面切岸盛土(上層)
33	10YR2/3	シルト	しまる	黄褐色土粒微量	〃
34	10YR3/3	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒多量、黄褐色土塊少量、炭粒微量	〃
35	10YR4/3	粘土質	しまる	黄褐色土粒少量、灰色土粒多量	〃
36	10YR3/3	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒多量、黄褐色土塊少量、炭粒微量	1・2面切岸盛土(下層)
37	10YR3/3	シルト	しまる	黄褐色土粒少量、黄褐色土塊少量、黒褐色土塊少量、 $\phi \sim 20$ mm礫微量、炭粒少量	〃
38	10YR3/3	シルト	しまる	黄褐色土粒少量、黄褐色土塊少量、黒褐色土塊微量、炭粒微量	〃
39	10YR3/3	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒少量、黄褐色土塊多量	〃
40	10YR5/4	シルト・精良	軟	暗褐色土塊少量	〃
41	10YR5/2	シルト・精良	軟	黄褐色土塊微量、青灰色土塊微量	〃
42	10YR3/3	砂質	軟	黄褐色土粒少量、 $\phi \sim 30$ mm礫多量	〃
43	10YR5/4	シルト	軟	黄褐色土粒微量	〃
44	10YR2/3	シルト	しまる	黄褐色土粒少量、褐色土塊多量	〃

土層No.	土色	土質	しまり	含有物	分類・備考
45	10YR4/4	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒少量、暗褐色土塊微量、 $\phi \sim 20\text{mm}$ 礫微量	3・4面切岸先端盛土(上層)
46	10YR5/4	シルト・精良	しまる	$\phi \sim 3\text{mm}$ 礫微量	〃
47	10YR2/3	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒少量、褐色土粒多量	〃
48	10YR4/4	シルト・精良	しまる	$\phi \sim 5\text{mm}$ 礫微量	〃
49	10YR2/3	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒微量、灰色土粒少量、 $\phi \sim 3\text{mm}$ 礫少量	〃
50	10YR4/4	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒多量、黄褐色土塊多量、暗褐色土粒少量、灰色土塊少量	〃
51	10YR2/3	シルト・精良	しまる	褐色土粒少量	〃
52a	10YR4/4	シルト		黄褐色土粒多量、黄褐色土塊多量、黒褐色土塊多量、 $\phi \sim 30\text{mm}$ 礫少量	3・4面上層盛土(取込層)
52b	10YR4/4	シルト		黄褐色土粒少量、黒褐色土粒多量、 $\phi \sim 30\text{mm}$ 礫少量	〃
52c	10YR4/4	シルト		黄褐色土粒多量、黄褐色土塊多量、黒褐色土塊少量、 $\phi \sim 30\text{mm}$ 礫少量	〃
52d	10YR4/4	シルト		黄褐色土粒少量、黄褐色土塊多量、黒褐色土塊多量、 $\phi \sim 30\text{mm}$ 礫少量	〃
52e	10YR4/4	シルト		黄褐色土粒少量、暗褐色土粒少量、暗褐色土塊少量	〃
53	10YR2/3	シルト		黄褐色土粒微量、褐色土粒少量、 $\phi 30\text{mm}$ 礫多量、粗い	〃
54	10YR3/4	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒少量、 $\phi \sim 15\text{mm}$ 礫微量	3・4面切岸先端盛土(上層)
55	10YR5/4	シルト・精良	しまる	暗褐色土粒少量	〃
56	10YR4/4	シルト・精良	しまる	褐色土粒少量、灰色土粒少量	〃
57	10YR3/4	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒少量、 $\phi 5\text{mm}$ 礫少量、炭塊微量	〃
58	10YR3/4	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒少量、灰色土粒少量、炭塊微量	〃
59	10YR5/4	シルト・精良	しまる	褐色土塊多量	〃
60	10YR3/3	シルト		黄褐色土粒少量、暗褐色土塊少量、 $\phi \sim 30\text{mm}$ 礫微量、炭塊少量	3・4面下層盛土(上半)
61	10YR2/3	シルト		黄褐色土粒少量、暗褐色土塊少量、 $\phi \sim 30\text{mm}$ 礫少量、炭塊微量	〃
61'	10YR2/2	シルト		黄褐色土粒少量、暗褐色土塊少量、 $\phi \sim 30\text{mm}$ 礫少量、炭塊微量	〃
62	10YR2/3	シルト		黄褐色土粒少量、暗褐色土塊少量、 $\phi \sim 30\text{mm}$ 礫少量、炭塊多量、焼土粒少量	〃
62b	10YR2/3	シルト		黄褐色土粒少量、暗褐色土塊少量、 $\phi \sim 30\text{mm}$ 礫少量、炭塊多量、焼土粒少量	3・4面下層盛土(下半)
63	10YR5/4	シルト・精良	しまる	灰色土粒少量	3・4面切岸先端盛土(下層)
64	10YR4/4	シルト・精良	しまる	〃	〃
65	10YR5/6	シルト・精良	しまる	〃	〃
66	10YR2/3	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒少量	〃
67	10YR2/3	シルト		黄褐色土粒少量、 $\phi \sim 50\text{mm}$ 礫少量	3・4面下層盛土(上半)
67b	10YR2/3	シルト		黄褐色土粒少量、 $\phi \sim 50\text{mm}$ 礫少量	3・4面下層盛土(下半)
68	10YR5/4	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒少量	石列23及び周辺の粘土
69	10YR3/3	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒少量	〃
70	10YR4/3	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒少量	〃
71	10YR4/4	シルト・精良	しまる	黄褐色土塊微量、灰色土粒少量	〃
72	10YR4/4	シルト・精良	しまる	黄褐色土塊多量、黄褐色土粒多量	〃
73	10YR4/4	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒微量	〃
74	10YR4/4	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒少量、灰色土粒少量	〃
75	10YR4/4	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒多量、灰色土粒少量	〃
76	10YR2/3	シルト(やや粗い)		黄褐色土粒多量、 $\phi \sim 10\text{mm}$ 礫少量	3・4面下層盛土(下半)
77	10YR4/3	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒少量	石列23及び周辺の粘土
78	10YR2/3	シルト		黄褐色土塊多量	3・4面下層盛土(下半)
79	10YR2/3	シルト		黄褐色土粒少量、黒褐色土塊少量、 $\phi \sim 5\text{mm}$ 礫少量、炭粒微量、焼土粒微量	〃
80	10YR4/4	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒微量	3・4面切岸先端盛土(下層)
81	10YR4/3	シルト・精良	しまる	褐色土粒多量	〃
82	10YR2/3	シルト		褐色土粒少量、 $\phi \sim 20\text{mm}$ 礫少量、炭粒微量	5面(旧地表土)
82'	10YR2/2	シルト	軟	褐色土粒少量、 $\phi \sim 20\text{mm}$ 礫少量、炭粒微量	〃
83	10YR2/3	シルト	軟	褐色土粒少量、黄褐色土粒(地山起因土)少量	〃(漸移層)
84	10YR5/6	砂質	しまる	$\phi \sim 3\text{mm}$ 礫多量	〃(地山)
85	10YR5/6	シルト・精良	しまる	褐色土粒少量	石列23及び周辺の粘土
86	10YR5/3	シルト・精良	しまる	褐色土粒多量	〃
87	10YR2/3	シルト・精良	しまる	黄褐色土粒少量、炭粒微量、焼土粒少量	〃
88	10YR4/3	シルト		黄褐色土粒少量	3・4面下層盛土(下半)
89	10YR2/3	シルト		黄褐色土粒少量、黄褐色土塊少量、 $\phi \sim 70\text{mm}$ 礫少量、やや粗い	〃
90	10YR4/3	砂質		黄褐色土粒少量、 $\phi \sim 20\text{mm}$ 礫少量	〃
91	10YR2/2	シルト		黄褐色土粒少量、 $\phi \sim 50\text{mm}$ 礫少量	〃
92	10YR2/2	シルト		黄褐色土粒多量、黄褐色土塊多量、 $\phi \sim 50\text{mm}$ 礫少量	〃
93	10YR2/3	シルト		黄褐色土粒多量、黄褐色土塊多量、 $\phi \sim 50\text{mm}$ 礫多量	〃

第3節 遺物

1 焼物（第4表・第14図）

(1) 概要

今回、3A1 トレンチから出土した中世以前の焼物は出土量が非常に少ない。報告にあたり、縄紋土器2点、奈良・平安時代の焼物6点、中世の焼物34点、計42点を一覧表に掲載した。いずれも破片資料で、大半が中世の盛土（整地土）からの出土である。また、器形の復元が可能なものは少なく、26点を図示できたのみである。

(2) 縄紋土器（1・2）

2点出土した。1は深鉢の口縁部で、やや外反気味に開く。端部に外傾する面を取る。外面にはヘラ状工具により細い沈線紋を4条平行に横走させる。胎土は長石粒を含むが緻密で焼成良好、暗褐色を呈する。早期の田戸下層式であろう。2はやや内湾気味に開く鉢形の土器で、端部は丸く取める。外面は断面半円形の太い横走沈線を4条施し、うち1条には円形の沈線が付加される。内面には1条の低く太い突帯が横走る。焼成良好で褐色を呈する。施文や突帯等から、晩期に帰属するものか。

(3) 奈良・平安時代の焼物（3～6）

当該期の焼物は、黒色土器杯Aないし椀、須恵器蓋B・杯A・杯B・甕、灰陶陶器碗・小瓶等があり、須恵器が主体を占める。3・4は須恵器蓋Bの天井部と裾部の破片である。3は回転ヘラケズリの後、やや厚く扁平なつまみを付す。4は直に開く裾端部を下方に短くつまみ出す。5は杯B、6は外傾度の強い杯Aで、ともに薄手、青灰色で焼成良好。時期的には9世紀前半頃に位置付くものであろう。1次調査でもそうであったが、古代の遺物は全体的に須恵器の比重が高い。これは、殿村遺跡を含む会田盆地一帯が須恵器生産地の一角を占めており、実際に、過去において会田小学校敷地や長安寺付近からも須恵器窯址が確認されていることと関係が深く、生産地の様相を示しているものと考えられる。

(4) 中世の焼物（7～26）

34点が出土した。内訳は、在地産土師質土器16点（皿13・播鉢1・内耳鍋2）、在地産須恵質播鉢1点、瓦質土器風炉1点、瀬戸・美濃産播鉢4点、瀬戸・美濃産施釉陶器2点、中国産磁器3点である。出土傾向としては、5面および3・4面盛土（整地土）からのものが半数以上を占めている。

ア 5面（7～12）

7は遺構外の出土で、古瀬戸の瓶類、おそらく四耳壺の肩部と考えられる。4条の櫛描き平行沈線が施され、明緑色の灰軸が施される。内面にはロクロナデの後に施された工具による掻き上げ痕が見られる。古瀬戸前期様式に位置付けられようか。8～12は溝1455から出土した。8～11はロクロ成形の土師質土器皿である。9は小径の底部から大きく外開、10・11は大きく平らな底部から明瞭に屈折して立ち上がる一方、内面の立ち上がりはスムーズである。いずれも底部に回転系切り痕を残し、厚手だが精良な胎土である。12は在地系の須恵質播鉢である。外開する厚みのある口縁部は、端部に外傾する面を作る。播目は観察できない。内外面共に工具によるナデないしケズリを施す。暗灰色の粗い胎土である。8は無釉陶器の捏鉢口縁部で、端部を丸く取め、ヨコナデにより下方は薄手になる。胎土はやや粗く暗い灰白色を呈する。捏鉢は他に精良、灰白色な胎土の胴部片が1点ある。その他、図化できないが常滑と思われる壺・甕類の胴部片が3点得られている。

イ 3・4面 (13～18)

6点を図示した。土師質土器13～15はロクロ成形の皿で、いずれも胎土は精良である。13は内湾気味に開き、14・15は直開する。うち、15は厚みのある径の大きい底面から屈折して直立気味に立ち上がり、口縁端部を薄く仕上げ上げる。内面は外周部をやや窪ませる。また、端部内外および見込にタールが付着し、灯明皿に使用される。16は竜泉窯系の青磁碗底部で、軸は明緑色を呈し、畳付から底裏は露胎である。高台は断面四角形に削り出し、器壁は底部から立ち上がりまで均等な厚みである。見込に印花紋を施す。胎土は暗灰色で緻密。17は無軸陶器の控鉢下半部である。外面は回転ヘラケズリの後高台を貼付、内面は外周に沈を巡らす。胎土はやや粗く灰白色を呈す。18は土師質の控鉢で、肉厚に作られる。12と同様、端部に外傾する明瞭な面を作り出す。橙褐色を呈し、焼成は堅緻である。

ウ 2面

図示可能なものも含め、遺物は得られていない。

エ 1面 (19・20)

溝1457から中国産染付の端反皿が2点出土している。いずれも口縁部片で、19は外面に界線、内面に界線と四方禪紋と思われる紋様帯が描かれる。20は口縁部内外に界線、胴部外面に草花紋が配される。前者は染付皿B2群、後者はB1群と考えられる。

オ 最上面

図示できる遺物は得られていない。盛土内から土師質土器の内耳鍋、無軸陶器の控鉢、常滑と思われる甕の破片が得られている。

カ 耕作土・その他 (21～26)

耕作土および最上面を覆う土層中から出土した7点のうち、6点を図示した。21は大きく外開・外反する灰軸の皿である。22は瓦質土器の風炉で、頸部～肩部の破片である。厚手で、頸部との境界に断面半円形の突帯を巡らす。器壁が荒れるが、外面は研磨により平滑に仕上げられる。胎土精良、橙褐色を呈する。23～26は土師質土器の皿である。23・26は薄手で内湾気味に開き、24は直立する。25は外面下半部をヘラケズリし、口縁部のヨコナデはロクロによるものか判別し難く、手づくねの可能性もある。23・24・26はロクロ成形である。26は口縁端部にタールが付着する。

キ 小結

今回、少数ながらも溝1455を中心に5面段階の資料が得られた。土師質土器以外は、古瀬戸前期の四耳壺や無軸陶器の控鉢、在地系の須恵質控鉢等、13～14世紀代に中心を置くもののみである。殿村遺跡の出土遺物群の中では古相を呈し、層的にも矛盾はない。一方、1面の溝1457からは染付皿B2群と思われる破片が出土した。16世紀後半の年代が与えられ、小片とはいえ1面の年代を考える上で重要な資料となる。また、全体的な傾向として、遺物数が少ない中、茶道具である風炉や、染付等の輸入陶磁器が出土している点に特徴を見出すことができ、これまでの1・2次調査における所見と傾向を一にしている。

2 金属製品 (第14図)

中世以前に位置付く確実な金属製品は、3層から出土した治平元宝(初鑄1064)1点のみである。潰れが少なく、銭銘は容易に判読できる。

※須恵器および中国産染付の器種分類は以下の文献に拠った。

(財)長野県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道長野埋蔵文化財発掘調査報告書4 松本市内その1 総論編』
小野正敏 1982 『14～16世紀の染付碗、皿の分類と年代』『貿易陶磁研究』No.2

第4表 焼物一覽

編	出土地点		器種	器名	口径	底径	高さ	残存状態		色澤	備註
	層	地層						土層	程度		
1	3A1	1	1型赤土	碗	2.4					褐色	ナリ、外底被付焼痕、早引取痕
2	3A1	3-4	3・4型赤土	碗	2.4					褐色	ナリ、内面赤、外底被付焼痕、早引取痕
3	3A1	5	黒 1455	碗	2.4					褐色	ロウコナナリ、外底被付焼痕、早引取痕
4	3A1	4-5	4型赤土	碗	2.4		16.0	1/10		黒	ロウコナナリ、内面被付焼痕
5	3A1	3-4	3・4型赤土	碗	2.4		13.8	1/10		赤～黒	ロウコナナリ、1層目コナナリ
6	3A1	3-4	3・4型赤土	碗	2.4		13.4	1/8		黒	ロウコナナリ、1層目コナナリ
7	3A1	3-4	3・4型赤土	黒色土器 A	林 Aor 焼					褐色	黒～褐色
8	3A1	3-4	3・4型赤土	碗	2.4					褐色	ロウコナナリ、外底被付焼痕
9	3A1	5	黒 1455	碗	2.4		15.0	1/8		褐色	内面ロウコナナリ・ナリナリ、外底被付焼痕、早引取痕、外底被付
10	3A1	5	黒 1455	碗	2.4		18.4	1/8		褐色	ロウコナナリ、外底被付焼痕、早引取痕
11	3A1	5	黒 1455	碗	2.4		8.2	3/8		褐色	ロウコナナリ、外底被付焼痕、早引取痕
12	3A1	5	黒 1455	碗	2.4					褐色	ロウコナナリ、外底被付焼痕、早引取痕
13	3A1	3-4	3・4型赤土	碗	2.4		10.0	1/8		褐色	ロウコナナリ、外底被付焼痕、早引取痕
14	3A1	3-4	3・4型赤土	碗	2.4		18.4	1/6		褐色	ロウコナナリ、1層目コナナリ、外底被付焼痕、早引取痕
15	3A1	3-4	3・4型赤土	碗	2.4		11.4	1/4	1/4	褐色	ロウコナナリ、外底被付焼痕、早引取痕
16	3A1	3-4	3・4型赤土	碗	2.4					褐色	ロウコナナリ、外底被付焼痕、早引取痕
17	3A1	3-4	3・4型赤土	碗	2.4		5.0	1/6		褐色	ロウコナナリ、外底被付焼痕、早引取痕
18	3A1	3-4	3・4型赤土	碗	2.4			1/8		褐色	ロウコナナリ、外底被付焼痕、早引取痕
19	3A1	1	黒 1437	碗	2.4					褐色	ロウコナナリ、外底被付焼痕、早引取痕
20	3A1	1	黒 1437	碗	2.4					褐色	ロウコナナリ、外底被付焼痕、早引取痕
21	3A1	1	1型赤土	碗	2.4					褐色	ナリ、外底被付焼痕、早引取痕
22	3A1	1	1型赤土	碗	2.4					褐色	ナリ、外底被付焼痕、早引取痕
23	3A1	1	1型赤土	碗	2.4					褐色	ナリ、外底被付焼痕、早引取痕
24	3A1	1	1型赤土	碗	2.4					褐色	ナリ、外底被付焼痕、早引取痕
25	3A1	1	1型赤土	碗	2.4					褐色	ナリ、外底被付焼痕、早引取痕
26	3A1	1	1型赤土	碗	2.4					褐色	ナリ、外底被付焼痕、早引取痕

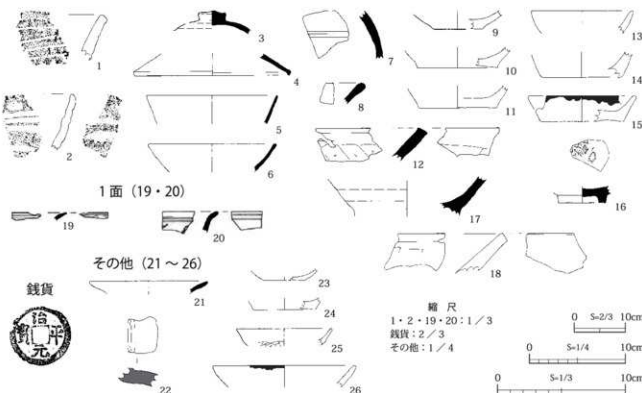
※注記欄の () は推定窯高を示す

縄文土器 (1・2)

須恵器 (3~6)

5面 (7~12)

3・4面 (13~18)



第14図 焼物

3 石器 (第5表、第15図)

今回の調査では合計118点の石器が出土している。内訳は打製石鏃7点、石鏃未成品1点、サイドスクレーパー1点、石核6点、敲石1点、二次加工ある剥片7点、微細剥離ある剥片11点、剥片81点、礫片3点がある。定型的な石器の中で破損が小さく全体形がわかるもののみ6点を図示した。石器の時代区分は共伴遺物に相当するものとし縄紋時代に属すると推定される。本遺跡の主要時期である中世に帰属する石器ないし石製品は1点も確認できなかった。出土場所は3・4面を除くすべての面でみられ、ほとんどが整地土中または溝状遺構の覆土から出土している。図示したものを中心に概要を述べるが、それ以外のものは一覧表を参照されたい。

1～3は無茎凹基鏃であり、いずれも片方の逆刺が欠損している。1はチャート製で長さと同幅がほぼ同じで正三角形に近く、いわゆる三角形鏃に分類される。3は珪質頁岩製で片側は外湾し、反対側は直線的であり半月型を呈する。逆刺部が側辺から張り出すように作られている。

4はチャート製の無茎凹基鏃である。側辺は最大幅が上方にくるように外湾している。基部に細部調整がほとんどみられない。

5は凝灰岩製のサイドスクレーパーである。両側辺の一部が欠損。縦長剥片を素材にして、両側面に両面加工の直刃をもつ。主要剥離面からみて右側辺の刃部調整が反対側より深いのは、左側辺を主に使用していたと推測できる。

6を含め石核6点は黒曜石製で、剥離の方向に規則性はみられない。

第5表 石器一覧

図 No.	注記 No.	地区	サブトレ	検出面	遺構名	出土位置・層位・備考	石材	寸法 (mm)			重量 (g)	破損状況	備考
								最大長	最大幅	最大厚			
1	3A1	ST2	1	溝1457	覆土	チャート	12.2	12.2	4.2	0.4	片方の逆刺折れ	無茎凹基鏃 (三角形鏃)	
3	22	3A1	ST3	3・4	整地土 (下層)	珪質頁岩	(22.4)	(11.9)	4.1	(0.8)	片方の逆刺折れ	無茎凹基鏃	
85	3A1	ST7・8	3・4		整地土	黒曜石	(13.4)	(16.5)	3.1	(0.0)	両逆刺・先端折れ	無茎凹基鏃	
93	3A1	ST7・8	3・4		整地土	チャート	(25.9)	(21.7)	(5.9)	(3.9)		基部折れ	
102	3A1	ST7・8	3・4		整地土	珪質頁岩	(35.5)	(27.5)	(10.0)	(6.8)		基部折れ	
2	45	3A1				掘丸 (水道管)	チャート	16.8	15.2	4.4	1.2	片方の逆刺折れ	無茎凹基鏃
4	49	3A1				9～10層	チャート	32.6	20.3	8.3	5.2		無茎凹基鏃 基部調整なし

石鏃未製品

図 No.	注記 No.	地区	サブトレ	検出面	遺構名	出土位置・層位・備考	石材	寸法 (mm)			重量 (g)	破損状況	備考
								最大長	最大幅	最大厚			
94	3A1	ST7・8	3・4		整地土	チャート	33.7	27.6	9.2	8.1			

サイドスクレーパー

図 No.	注記 No.	地区	サブトレ	検出面	遺構名	出土位置・層位・備考	石材	寸法 (mm)			重量 (g)	破損状況	備考
								最大長	最大幅	最大厚			
5	78	3A1	ST7・8	3・4		整地土	凝灰岩	57.2	33.5	9.9	17.0		

石核

図 No.	注記 No.	地区	サブトレ	検出面	遺構名	出土位置・層位・備考	石材	寸法 (mm)			重量 (g)	破損状況	備考
								最大長	最大幅	最大厚			
36	3A1		1			整地土	黒曜石	18.5	25.2	22.5	7.7		
39	3A1		1			整地土	黒曜石	20.3	18.2	13.2	4.7		
80	3A1	ST7・8	3・4			整地土	黒曜石	31.7	18.9	8.2	4.7		
67	3A1	ST7	3・4			整地土 (中～下層)	黒曜石	16.9	10.5	7.8	1.0		
6	10	3A1	ST3	5	溝1455	覆土	黒曜石	26.9	33.2	19.2	12.4		
9	3A1	ST3	5	溝1455	覆土	黒曜石	30.0	17.3	8.3	5.7			

敲石

図 No.	注記 No.	地区	サブトレ	検出面	遺構名	出土位置・層位・備考	石材	寸法 (mm)			重量 (g)	破損状況	備考
								最大長	最大幅	最大厚			
108	3A1	ST8	3・4			整地土先端部	砂岩	130.4	46.3	34.4	379.7		表面焼熱

二次加工ある剥片

図 No.	注記 No.	地区	サブトレ	検出面	遺構名	出土位置・層位・備考	石材	寸法 (mm)			重量 (g)	破損状況	備考
								最大長	最大幅	最大厚			
24	3A1	ST5	0			整地土	黒曜石	17.6	21.6	5.8	2.0		
17	3A1	ST3	3・4			整地土 (上層)	チャート	25.6	21.8	5.3	2.5		
66	3A1	ST7	3・4			整地土 (中～下層)	黒曜石	(17.9)	(25.1)	(8.5)	(3.1)	折れ	

図 No.	注記 No.	地区	サブトレ	検出面	遺構名	出土位置・層位・備考	石材	寸法 (mm)			重量 (g)	破損状況	備考
								最大長	最大幅	最大厚			
104	3A1	ST7・8	3・4			整地土	柱頭瓦岩	18.1	21.5	4.6	2.5		
8	3A1	ST3	5	溝 1455		覆土	黒曜石	13.3	18.9	5.9	3.3		
116	3A1	ST8	5			旧表土	チャート	22.9	19.4	19.4	7.0	3.0	
29	3A1					1～4層	黒曜石	16.2	13.1	5.0	0.6		

破損別種ある断片

図 No.	注記 No.	地区	サブトレ	検出面	遺構名	出土位置・層位・備考	石材	寸法 (mm)			重量 (g)	破損状況	備考
								最大長	最大幅	最大厚			
3	3A1	ST2	0			整地土	チャート	34.4	17.1	9.8	4.5		
55	3A1	ST7	2			整地土先端部	チャート	35.6	26.1	8.5	8.5		
65	3A1	ST7	3・4			整地土 (中～下層)	チャート	24.1	22.6	6.1	2.8		
71	3A1	ST7	3・4			整地土 (中～下層)	チャート	32.9	19.2	6.6	3.8		
77	3A1	ST7・8	3・4			整地土	黒曜石	19.9	16.7	6.3	2.5		
109	3A1	ST8	3・4			整地土先端部	黒曜石	54.1	28.2	8.6	14.3		
11	3A1	ST3	5	溝 1455		覆土	瓦岩	18.0	17.3	5.0	2.0		
73	3A1	ST7	5			旧表土	黒曜石	20.2	13.9	6.1	1.7		
115	3A1	ST8	5			旧表土	黒曜石	21.9	12.0	7.9	1.6		
23	3A1	ST4				5～10層	黒曜石	23.0	14.4	5.3	1.8		
50	3A1					9～10層	砂岩	41.7	24.9	6.7	6.2		

断片

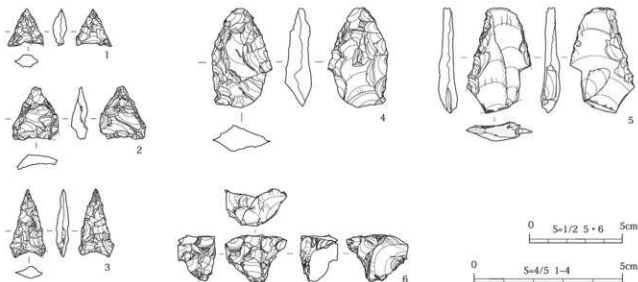
図 No.	注記 No.	地区	サブトレ	検出面	遺構名	出土位置・層位・備考	石材	寸法 (mm)			重量 (g)	破損状況	備考
								最大長	最大幅	最大厚			
4	3A1	ST2	0			整地土	チャート	13.9	9.9	8.4	0.9		
5	3A1	ST2	0			整地土	チャート	13.6	12.4	5.4	1.0		
6	3A1	ST2	0			整地土	黒曜石	22.7	11.0	4.6	0.8		
35	3A1		0			整地土	黒曜石	28.6	17.3	7.3	4.1		
2	3A1	ST2	1	溝 1457		覆土 b 層	黒曜石	24.0	11.5	2.9	0.8		
27	3A1		1	溝 1457		南平	チャート	42.4	24.4	5.7	4.9		
37	3A1		1			整地土	黒曜石	15.5	11.9	4.4	0.6		
38	3A1		1			整地土	チャート	18.1	11.9	3.3	0.7		
40	3A1		1			整地土	黒曜石	12.0	19.7	2.1	0.5		
41	3A1		1			整地土	黒曜石	15.5	15.1	3.1	0.7		
56	3A1	ST7	2			整地土先端部	砂岩			4.6	2.1		
57	3A1	ST7	2			整地土先端部	黒曜石	(14.3)	(12.8)	(1.1)	(0.2)	折れ	
58	3A1	ST7	2			整地土先端部	黒曜石	13.5	10.4	5.2	0.4		
107	3A1	ST8	3・4			整地土先端部	チャート	47.8	31.0	11.6	15.6		
15	3A1	ST3	3・4			整地土 (上層)	黒曜石	15.5	18.0	4.4	0.7		
16	3A1	ST3	3・4			整地土 (上層)	黒曜石	13.1	10.8	3.1	0.3		
18	3A1	ST3	3・4			整地土 (上層)	黒曜石	20.0	25.7	8.9	3.9		
26	3A1	ST5	3・4			整地土 (上層)	黒曜石	16.5	10.1	9.1	0.8		
59	3A1	ST7	3・4			整地土 (上層)	チャート	39.5	21.8	9.8	6.5		
60	3A1	ST7	3・4			整地土 (上層)	チャート	17.2	9.3	3.8	0.7		
61	3A1	ST7	3・4			整地土 (上層)	チャート	37.9	32.2	9.9	10.8		
20	3A1	ST3	3・4			整地土 (中層)	チャート	26.1	20.1	3.8	1.7		
21	3A1	ST3	3・4			整地土 (中層)	粘板岩	57.3	26.5	6.4	17.9		破面はみられないが破損した層の可能性あり
64	3A1	ST7	3・4			整地土 (中層)	黒曜石	20.4	13.4	6.0	1.2		
63	3A1	ST7	3・4			整地土 (中層)	瓦岩				7.2		
19	3A1	ST3	3・4			整地土 (中～下層)	チャート	13.2	19.8	2.7	0.6		
68	3A1	ST7	3・4			整地土 (中～下層)	チャート	20.0	19.5	5.7	2.9		
69	3A1	ST7	3・4			整地土 (中～下層)	チャート	22.5	6.7	5.9	0.9		
70	3A1	ST7	3・4			整地土 (中～下層)	チャート	12.6	20.1	4.0	1.3		
79	3A1	ST7・8	3・4			整地土	緑色凝灰岩	31.8	27.5	7.3	6.0		
81	3A1	ST7・8	3・4			整地土	黒曜石	16.9	29.3	10.6	3.6		
82	3A1	ST7・8	3・4			整地土	黒曜石	14.3	22.1	6.3	1.4		
83	3A1	ST7・8	3・4			整地土	黒曜石	21.2	15.0	4.4	1.1		
84	3A1	ST7・8	3・4			整地土	黒曜石	11.2	23.0	6.9	1.4		
86	3A1	ST7・8	3・4			整地土	黒曜石	11.1	17.2	5.5	0.6		
87	3A1	ST7・8	3・4			整地土	黒曜石	12.7	20.9	5.3	1.2		
88	3A1	ST7・8	3・4			整地土	黒曜石	13.2	17.2	5.0	1.1		
89	3A1	ST7・8	3・4			整地土	黒曜石	8.6	27.6	9.2	1.9		
90	3A1	ST7・8	3・4			整地土	黒曜石	16.4	8.6	2.5	0.4		
91	3A1	ST7・8	3・4			整地土	黒曜石	10.1	13.5	3.2	0.4		
92	3A1	ST7・8	3・4			整地土	黒曜石	8.2	9.2	2.8	0.2		
95	3A1	ST7・8	3・4			整地土	チャート	28.2	16.1	7.3	3.7		
96	3A1	ST7・8	3・4			整地土	チャート	17.7	20.5	3.7	1.3		
97	3A1	ST7・8	3・4			整地土	チャート	15.2	14.1	1.5	0.3		
98	3A1	ST7・8	3・4			整地土	チャート	19.0	11.1	5.7	1.0		

図 No.	注記 No.	地区	サブトレ	検出面	遺構名	出土位置・層位・備考	石材	寸法 (mm)			重量 (g)	破損状況	備考
								最大長	最大幅	最大厚			
99	3A1	ST7・8	3・4			整地土	チャート	25.2	5.6	2.2	0.4		
100	3A1	ST7・8	3・4			整地土	チャート	8.8	7.4	1.2	0.1		
101	3A1	ST7・8	3・4			整地土	チャート	6.6	2.5	1.1	0.1未満		
103	3A1	ST7・8	3・4			整地土	珪質頁岩	24.4	17.5	4.3	1.7		
105	3A1	ST7・8	3・4			整地土	珪質頁岩	15.9	14.8	2.7	0.6		
110	3A1	ST8	3・4			整地土	黒曜石	34.7	23.3	6.6	4.1		
111	3A1	ST8	3・4			整地土	黒曜石	16.9	18.1	11.1	2.1		
112	3A1	ST8	3・4			整地土	チャート	18.1	13.6	2.8	0.6		
113	3A1	ST8	4～5			整地土	チャート	22.1	18.8	4.3	1.6		
114	3A1	ST8	4～5			整地土	チャート	20.0	12.4	3.4	0.7		
12	3A1	ST3	5	溝 1455		覆土	黒曜石	13.8	17.0	7.0	1.4		
13	3A1	ST3	5	溝 1455		覆土	チャート	24.7	18.8	6.1	3.1		
14	3A1	ST3	5	溝 1455		覆土	砂岩	54.7	54.5	16.7	44.9		
74	3A1	ST7	5			旧表土	黒曜石	14.5	21.1	6.4	1.7		
75	3A1	ST7	5			旧表土	黒曜石	15.2	22.4	5.6	1.5	折れ	
76	3A1	ST7	5			旧表土	チャート	15.6	11.8	2.1	0.4		
106	3A1	ST8	5	住 3		覆土	砂岩	44.4	33.5	5.1	7.5		
25	3A1	ST5				9～10層	泥岩	51.9	42.1	7.9	14.1		
28	3A1					1～4層	チャート	20.9	10.3	1.5	0.3		
30	3A1					1～4層	黒曜石	24.5	10.6	5.4	1.0		
31	3A1					1～4層	黒曜石	16.3	12.9	5.5	1.0		
32	3A1					1～4層	黒曜石	12.5	5.3	3.7	0.3		
33	3A1					1～4層	黒曜石	6.9	4.5	3.2	0.1		
34	3A1					1～4層	珪質頁岩	33.2	27.5	7.5	6.0		
118	3A1	ST8				3～4層	チャート	31.4	26.1	6.2	5.7		
44	3A1					覆瓦 (水道管)	黒曜石	15.9	9.2	5.2	0.5		
46	3A1					覆瓦 (水道管)	チャート	23.1	18.5	7.7	2.2		
47	3A1					覆瓦 (水道管)	チャート	12.7	6.3	1.9	0.2		
48	3A1					覆瓦 (水道管)	凝灰	16.5	6.5	6.0	0.8		
7	3A1	ST2				5～10層	砂岩	28.3	17.7	5.9	4.1		
43	3A1		3・4			検出面	黒曜石	20.1	15.9	7.9	1.5		
42	3A1					9～10層	黒曜石	29.9	13.3	4.0	1.3		石刃の可能性あり
51	3A1					5～8層	黒曜石	24.1	17.0	3.0	1.2		
52	3A1					5～8層	黒曜石	18.3	11.2	4.4	0.7		
53	3A1					5～8層	黒曜石	7.2	13.1	0.8	0.1		
54	3A1					5～8層	チャート	12.9	5.0	2.0	0.2		

破片

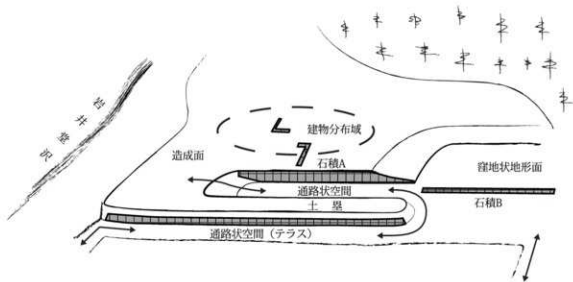
図 No.	注記 No.	地区	サブトレ	検出面	遺構名	出土位置・層位・備考	石材	寸法 (mm)			重量 (g)	破損状況	備考
								最大長	最大幅	最大厚			
62	3A1	ST7	3・4			整地土 (中層)	チャート				0.7		
72	3A1	ST7	3・4			整地土 (中～下層)	チャート				2.1		
117	3A1	ST8	5			旧表土	凝灰岩	52.4	40.3	13.6	23.3		

※寸法欄の () は現存値をあらわす

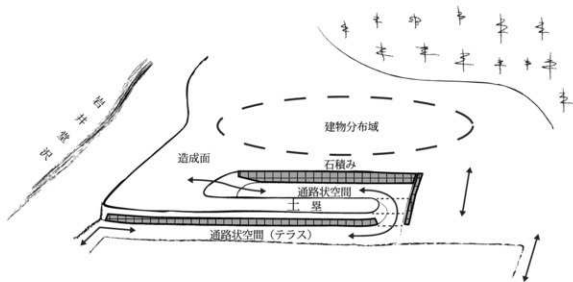


第15図 石器

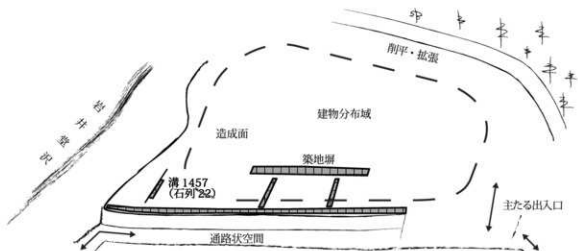
1 4面段階 (15世紀)



2 3面段階 (15世紀)



3 2面段階～1面段階 (15世紀末～16世紀代)



第16図 平場遺構の変遷 (現段階における推定)

第三章 調査のまとめ

殿村遺跡調査事業の2年目として、今回は1次調査で確認された、平場の南西部における状況を把握する目的で実施した。調査面積が狭く、道路部分を調査範囲から除外する等、制約もあり、必ずしも十分な調査内容とは言えなかったが、最後に成果と課題についていくつかを取り上げ、本調査のまとめとしたい。

1 グラウンド南西部の半島状地形の成立について

遺跡のある旧会田中学校校庭は、現状で南西隅が半島状を呈し、南に突出する地形となっている。これは、第7図に示した明治24年の地籍図でも確認でき、近世以前に遡る地割の痕跡とみている。とりわけ、南からまっすぐここに至り、岩井堂沢を越えて会田宿本町へと抜ける道も今日まで残されており、中世の平場遺構において虎口等の施設が存在する可能性もあった。

今回の調査の結果、グラウンドが造成された昭和28年まではここが畑地として利用され、地表面の連続状況から、現地形と同様、半島状をなしていたことが実際に確認された。しかし、中世の平場南面の切岸は、現地形先端より大きく北寄りに位置していた。その状況から、半島状地形の成立は、中世すなわち1面段階まで遡るものではないことが判明した。遺物の出土がなく正確な時期はわからないが、切岸は最終的に埋め立てられており、遺跡の廃絶後、土地利用が耕作地に移行していく過程で、現状の地割が成立したものと考えられる。

次に、今回は道と平場の関係を把握するには至らなかったが、各面において平場上の遺構が希薄な状況から、今回の調査トレンチ周辺が建物分布域の外、平場外縁部における空間利用の実態を示していると考えても差支えないであろう。その点で、1次調査で明確に捉えられなかったため全貌は明らかでないが、側壁の石列や硬化した底面を伴う溝1457については、主たる遺構分布域との境を分ける通路等の施設に関わるものと考えたい。その際、本遺跡でこれまでに確認された同種の遺構の中では唯一加工石材を使用し、直線的な側面を追求した石列22について、その上部遺構がどのようなものかが注目される。築石の天端が平坦に整えられているため元々1段構造だった可能性もあるが、通路に伴う施設と捉えるならば、上部に塀などの施設を構え、その土台として数段に積まれていた可能性も多分に考えられる。

2 平場南面の構造について

この調査では、1次調査で確認された平場が、南西側に連続的に広がっていることが確かめられた。残念ながら、西縁の切岸の状況を確認するまでには至らなかったものの、既に4面段階に台地西縁まで造成が及んでいたことは、周囲の状況から見ても明らかである。

次に、平場南面の切岸とその構造について、次のような所見を得ることができた。

まず、平場前面の築造方法については、1次調査所見と同様、先端部に土塁状の先行盛土を行い、その後背後、続いて上層の埋め立てを行う工程が確かめられた。その際、土塁状盛土に先行して、石列が構築されていたことも確認された。土層観察から、石列は造成の基礎構造物で築造されたものであり、精良なシルトで土台や上面を固める等、手の込んだ施工が行われている点が興味深い。こうした地業の後、表層には入念な版築を行い、切岸を緻密な構築土で固めている。3・4面段階において、切岸の法面には、腰巻状の低い石積が存していた可能性がある。それは2次調査で確認された土塁南面の石積Dに連なるものと考えられ、この段階の平場南面は、低い石積みで縁取られた姿が復元される(第16図)。

2面段階以降の造成は、これまでの所見と同様、整地による遺構面上昇に加え、南側への拡張が認めら

れた。また、1面段階に設けられた天端の石列は、平場南面の外郭施設、おそらく土塙の基礎と推定される。これまで、1面の平場南辺は後の土地利用による削平が著しかったため、どのような外郭施設が存したのか不鮮明だっただけに、今回その手掛かりを得ることができた点は、重要な成果の一つと言える。

3 遺構面の帰属時期について

第1次調査概報において、平場各面の変遷と調査段階における年代観を提示した。これは、主に整地土や石積前空間、土塁南空間の廃棄物層からの出土陶磁器に基づき、予察的に行ったものである。その後、2次調査において、2面段階以降に進んだ土塁南空間の埋め立て土に大窯製品が含まれることから、おおよそ2面以降を15世紀末以降であることを追認する形となった。さらに今回、1面段階の溝1457から、染付皿B2群と考えられる端反皿片を得たことにより、1面の年代が16世紀後半まで及ぶ可能性が高まった。

調査地に隣接する長安寺には、中世には調査地付近に大きな伽藍があって、天正10年(1582)の会田氏滅亡により寺勢が衰えた後、現在地に堂を移して再興したとの伝承がある(注)。これまで、遺跡は長安寺や補陀寺等近接する宗教施設との関わりや、中世に会田周辺の経営にあたった会田氏との関係が注目されてきたが、そうした歴史的事象と遺跡との時間的関係を示す良好な遺物には、これまであまり恵まれてこなかっただけに、今回、わずか1点の小片とはいえ、染付皿は重要な資料となる。

一方、15世紀と想定している本格的な造成開始以前の状況はどうか。1次調査では盛土下に存在する柱穴や溝等の遺構を断片的に確認し、4面段階以降の盛土中に含まれる遺物から14世紀以前における諸活動存在を予測してきた。そして今回、実際に遺物を伴う遺構を得られたことにより、その年代を捉えることが可能となった。また、中世前半期における活動域は、グラウンド中央から西側にかけての微高地上に展開し、柱穴(掘立柱建物)や溝、水溜遺構などから構成されることが明らかとなりつつある。15世紀以降の厚い盛土下に広がる遺構面は、今後も限定的な調査にならざるを得ないが、大規模な造成事業開始の契機を探る上で重要な鍵を握っており、今後地点を変えた調査の中でも可能な限り追求したい。

以上、今回の発掘調査からいくつかの成果についてまとめた。Aゾーンにおける平場の外郭構造や造成の過程、年代観については、調査の歩を進めるごとに明らかになりつつある。その一方、諸事情により今回は、当初予定していたAゾーン以外の地点における調査を断念した。そのため、中世における遺跡の広がりについては追求することができなかった。この点については、次年度以降の調査で改めて取り組みたいと考えている。

最後に、終始調査にご指導をいただいた調査指導委員会をはじめとする先生方、調査の遂行に際し理解と協力を惜しまれなかった地元の皆様方に感謝を申し上げ、本書の締めくくりとしたい。

(注)

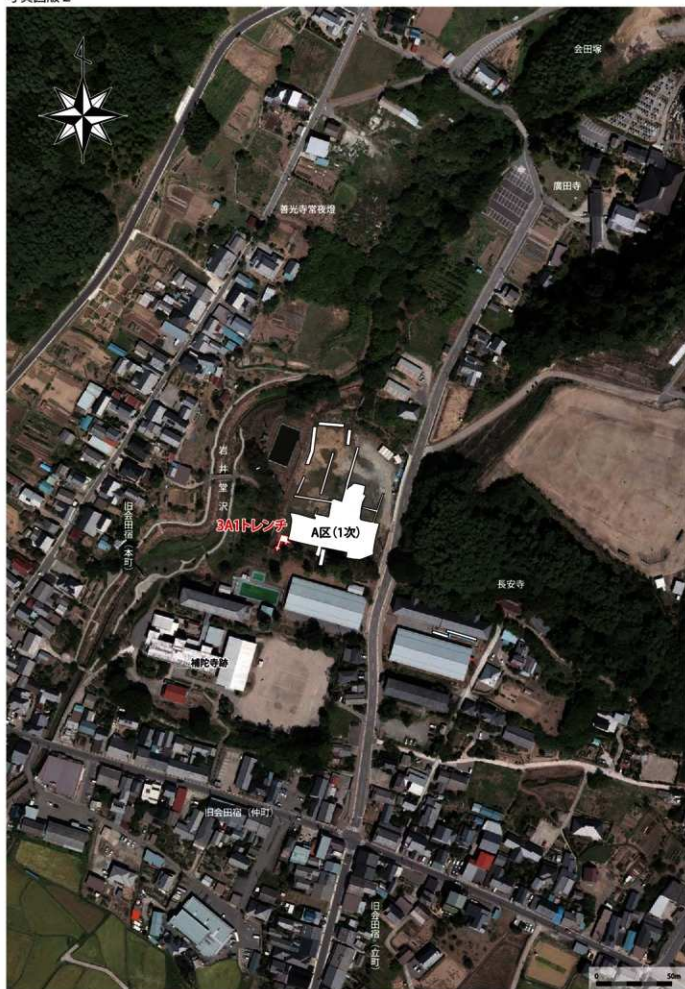
昭和50年代に前任職等から聞き取った松本県ヶ丘高校風土研究部の調査記録『嶺間』、また前任職の録者である引地節子氏からの聞き取り等による。



殿村遺跡・旧善光寺街道会田宿と虚空蔵山麓の景観（南から）



殿村遺跡（●印）と会田盆地の地形（虚空蔵山中ノ陣城上空から南を見る）



調査地の位置と周辺の地形 (S = 1 : 2500)



3A1 トレンチ全景 (北西から)



3A1 トレンチ全景 (東から)



5面住居址3（東上から・左の礫は3・4面切岸先端の石積か）



5面溝 1455 南部の円形土坑（西上から）



5面溝 1455 全景（南から）



石列 23 立面（3・4面盛土下層・南から）



石列 23（西上から）



石列 23 周辺の盛土の状況（西壁）



断ち割りトレンチ西壁土層断面（1・2面切岸と埋土の状況）



同上（1・2面段階切岸背後の盛土層）



同上（3・4面段階切岸と盛土の状況）

写真図版 6



斯ち割りトレンチ西壁土層断面（3・4面盛土上層の版築状況）



斯ち割りトレンチ北壁土層断面（左：溝 1455、右：ST6）



1面石列 22 検出状況・切岸盛土内の礫出土状況（南から）



2面石列22（北東から）



2面溝1457・石列22（南から）



1・2面溝1457南壁土層断面（中央は石列22）



2面P1458（右）・炭化物集中（左）



1面溝1457染付皿出土状況（西から）



1面溝1453（北から）



最上面遺構検出状況（南から）



出土遺物（焼物 1） №は図番号に一致



出土遺物（焼物2） アルファベットは焼物一覧（第3表）に一致



出土遺物（石器） Noは図番号に一致



作業風景



現地説明会



保護砂による埋め戻し

報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとしとのむらいせきだい3じはっかつちょうさほうこくしょ							
書名	長野県松本市殿村遺跡第3次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	№211							
編著者名	竹原 学、原田健司							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 松本市丸の内3番7号 TEL 0263-34-3000 (代)							
	(記録・資料保管：松本市立考古博物館 松本市中山3738番地1 TEL 0263-86-4710)							
発行年月日	2013(平成25)年3月26日(平成24年度)							
ふりがな	ふりがな	コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村						
とのむらいせき 殿村遺跡	ながのけん まつもとし 松本市 あいだ 会田 536外	20202	1023	36度 21分 12秒	137度 59分 34秒	20110719 ～ 20111107	36.0㎡	範囲内容確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
殿村遺跡	散布地 集落跡 社寺跡 城館跡	縄紋 古代 中世 不明	なし なし 石列 溝状遺構 ピット 住居址	3基 6基 6基 1基	土器・石器 黒色土器・須恵器・灰輪陶器 焼物：土師質土器(皿・播鉢・内耳鍋) 瓦質土器(風埴) 妬器(須恵質播鉢・珠洲貫・常滑貫) 陶器(無輪陶器控鉢・古瀬戸四耳壺・皿) 中国産磁器(染付皿・青磁碗) 金属製品：銅銭(治平元宝)			
要約	宗教施設と推測される室町時代の大規模な平場の南西部の状況を確認した。その結果、平場南縁を画する切岸と、その回収状況を確認した。また、造成開始以前(14世紀以前)の遺構面と、遺物を伴う遺構を検出した。遺物は、非常に少数ながらも、瓦質土器風埴や貿易陶磁(青磁碗・染付皿)等遺跡の性格に深く関わる遺物を得た。							

殿村遺跡発掘調査報告書一覧

『殿村遺跡—第1次発掘調査概報—』 2011年3月発行

『殿村遺跡—第2次発掘調査報告書—』 2012年3月発行

『殿村遺跡—第3次発掘調査報告書—』 2013年3月発行

松本市文化財調査報告№211

長野県松本市

殿村遺跡

—第3次発掘調査報告書—

発行日 平成25年3月26日

発行者 松本市教育委員会

〒390-8620

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 精美堂印刷株式会社